
I S 〈インフィニット・ストラトス〉 ～五つのコアを持つ男～

Jam

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ヘインフィニット・ストラトス〱五つのコアを持つ男〱

【Nコード】

N0356T

【作者名】

J a m

【あらすじ】

確か俺は高校の受験会場で義兄弟と行く途中だったはず。

そしたら俺死んじゃった!?

なんだかんだで生き返ってもまた大変。

行った受験会場で会場で事件!?

ついでに学校でも事件!?

・・・とりあえず死なないように頑張ります。

作者はまだまだ素人です。どうか温かい目でご覧ください。

第一話「ここはどこ？ 私は・・・俺だな」(前書き)

思いついたから、書きたくなったからそれだけの理由で書きました。
温かい目で見守ってくださいとうれしいです。

第一話「ここはどこ？ 私は・・・俺だな」

さっきまで高校の受験会場に行く位置にいたはずだが、あたりは真っ白、そんな中に俺はいた。

どこまでも続く真っ白い床、どこまでも続くく真っ白い壁？どこまでも続く真っ白い天井or空。なんて言うか・・・

「気分が・・・ウプ」

「うわ！吐かないで下さいよ！」

「どちら、ウップさんですか？」

「いや、もう無理してしゃべらないで。どうぞ横になってください」

「すみません。お言葉に甘えさせてもらいます」



何とか体調が回復してきた。ふう、それじゃ

「どうも、お見苦しいところをお見せしてしまってすみません」

「いえいえ、こちらもある場所に行かせてしまって申し訳ない」

今現在、真っ白かった部屋は和風な、畳の部屋になっている。
おまけに、お茶まで出してもらって。いやゝ至りつくせりですな。
さて、今日の前にいて俺と会話している人誰だっけ？知り合いじゃないよな？

「知り合いじゃないですよ。初対面です」

あ、そうなのか。それならよかった。ん？てかいま俺しゃべったっけ？

「しゃべってませんよ。心を読んだんです」

「な、なんだって!？」

「みなさん、やっぱりあわてますね」

そんな、心の中まで敬語を使わなくちゃいけないなんて。

「・・・そういうあわて方はあなたが初めてです」

そうですか。でどちらさんですか？人の家で勝手にこんな

「あえて言うならここは私の家なんですが……。そろそろ、話を進めないといけませんね」

そうですか。じゃあどうぞ。

「敬語なしでいいので普通に話してください」

「そうか。確かに口でしゃべらないのも失礼だしな」

「しっかり聞いてください実は……」

「フムフム、なるほど。そういうわけか」

「まだ何も話してないんですが」

「あんたは神様で、ほかの神様が馬鹿やって俺を殺しちゃったからその尻拭いをさせられているってどこか？」

「なんで分かったんだ!？」

「勘は昔からいいんだ」

「良すぎだろ……」

「俺も素だし、お前も素で話していいんだぞ」

「それじゃ俺も素で、事情はさっきのであつて。でお前を生き返

らせるんだが・・・」

「どこの世界がいいか選ぶのか？」

「そのことだが・・・お前、自分の世界に戻ってくれるか？」

「へ？」

俺は正直どこの世界でもいいんだが、まだ兄と姉に恩を返してないしな。

「いいぞ、というか助かる」

「そうかそうか、そりゃ良かった」

そう言って肩をたたいてくる神様。いやなんて言うかフレンドリーだな。
顔をよく見ると美形でなんか頼れる兄貴って感じだ。俺の兄とは違うな。

「代わりになんか能力をつけてやる」

「いやいや、普通の世界で特殊な力持っても面倒なだけでしょ」

「お前の世界は普通じゃないんだよ」（ボソ）

「ん？なんか言った？」

「いや、気にすんな。まあ、力は置いといてなんか質問あるか？」

「はい先生！」

「先生言うな！でなんだ？」

ここで先ほどから考えていた疑問を尋ねる。

「俺を元いた世界に生き返らせてくれるらしいけど、それって俺に負担はないのか？」

俺は、ほかの人を不幸にしてまで生き返る気はない。そんなことして生き返って恩返ししても頭をたたかれるだけだ。だが

「おいおい、俺をなめるな。そのくらい負担になんねえよ。俺を誰だと思ってやがる」

「神様」

「ただの神じゃないんだなこれが！」

「あっそ」

「興味ゼロかよ！」

「言われても分かんないしな。たぶん」

「まあいいや、他には？」

「今度はお願いで・・・」

「なんだ？聞いてやろう」

よっしゃ！じゃあ

「顔をカッコよくしておくれ！」

「・・・お前それ本気で言ってるのか？」

「出来ないのか・・・！？頼むよ神様ああ！」

「出来ると思うのか？」

なんだと・・・俺の顔はそこまでひどいのか？

「そうじゃないんだけどなあ。ハァ」

「まあ、いいや。そんじゃ準備万端、ちゃちゃと生き返って試験でも受けようかな」

「時々俺も遊びに行くかもしれないから」

「歓迎するぜ」

「それじゃ、頑張ってこい」

「はいはい」

そして、俺の足元に穴が・・・え？

「穴あああああ！？」

死ぬ死ぬ死んじまう！まだ生き返ってすらいらないのに死にたくない！
そして体が穴に落ちる直前に

「ヤバい！ミスった！」

手を？まえられて助かった。

「いや、悪かったな。間違えちまった。ふつうの人用の出口はあっちだ」

「間違いで殺されてたまるか！」

「今度は大丈夫だ」

「死んだら恨むぞ！」

「もう死んでるけどな」

そして俺は階段を降りていく。て、これどこに出るんだ？

「死んだところのすぐそばの路地裏だ。安心しろ人がいないようにしてるから」

「あっそ。じゃあな！」

「おう！」

そして階段を下りてった。

そしたら周りが光って・・・普通の場所にたどり着いた。

「あゝあ、夢じゃなさそうだし急ぐか」

「おい！どこ行ってたんだ！？」

そしたら、目の前に義理の兄弟・・・織斑一夏がいた。

「あゝ、悪い」

「試験会場に急ぐぞ！」

そして、一夏と一緒に俺・・・織斑 涼介（りょうすけ）は走る。
この後にめんどくさいことが待ってるとも知らずに。



先ほど涼介がいた場所。そこでは
涼介の前に現れた神と一人の青年のような人が話している。

「何やってるんですか。あなた直々にしなくたっていいでしょうに」

「いいだろ別に。優秀な部下がいて暇なんだし」

「まったく、こんなのがあの————なんて」

「ハッハッハ！ま、そうゆうことで時々出かけるから」

「ハアゝわかりましたよ・・・」

そこで青年は困ったような楽しいよう顔で言う

「ゼウス様」

「さて、この世界はどう変わるかな？」

第一話「ここはどこ? 私は・・・俺だな」 (後書き)

読んでくださった方ありがとうございます。

感想なんかもらえるとうれしいです。

それでは次回。

第二話「俺が迷子になったんじゃない」(前書き)

今回はほとんど説明です。

第二話「俺が迷子になったんじゃない」

涼介 side

さてと・・・

「「さみいゝゝ」」

今は二月の真ん中、俺たちは中学三年生。現在受験の真ただ中。

「なんで一番近い高校の、試験のために四駅乗らなきゃいけないんだ・・・。しかも今日、超寒いじゃねーか・・・」

「確かケータイも取られるんだろ？はゝあ、誰だよ何とか知恵袋に問題送ったやつ・・・」

近年起きたカンニング騒動で各学校が入会場を二日前にに通知するなんて面倒なことされても、俺たちはただの三年生、愚痴るしかできない。

ちなみに言っておくと俺たちが受ける学校は私立あいえつ藍越学園。

私立なのに学費がとても安い。そのほかにもいろいろ理由はあるが置いておこう。

まあ一番の理由は、俺は織斑家の義理の家族。それで養ってもらっ

てるのに学費が高い高校なんか間違ってもいけない。

「いつまでも千冬姉ちふゆねえの世話になってるわけにもいかないしなあ……」

「そうだな」

これも理由の一つ。私立藍越高校あいえつは卒業後までケアしてくれるというのだ。マジありがたい。そして、いつか世話になった千冬さんに恩返しをしなくちゃな。

そうこうしてゐるうちに会場についた。会場はどこにでもありそうな多目的ホール。

でとりあえず二階に行かなくちゃいけないんだが……

「えーと……あれ？これ、どうやって二階に行くんだ？」

「そこを……ん？あーれ？これは……？」

「なんなんだこの『常識的に作らない俺カッコイイ』的な感じはなんなんだ……。階段はどこだ？」

「いやどっちかって言ったら『階段の場所を君は見つけれるのか……』みたいな」

「どこのアトラクションだよ……」

てか

「・・・・・・・・」

中学三年にもなって迷子。——やめて！そんな目でこっちを見ないで！！

「おい一夏！お前についてきたせいでこうなったんだ！責任とれ！！」

「な！？ついてきたお前が悪いだろ！」

「テメェのせいだろ！ってこんなことしても仕方ないしな。どうする？」

「よし、あのドアを開けよう。それで大体何とかなるんだ！」

「仕方ない・・・信じるぞ一夏！」

「任せろ涼介！」

何ともならなかったら・・・ハッハッハッハ！
そしてドアを開け入ってみると

「あー、君、受験生だね。はい、向こうで着替えてね。時間押してるから急いでね」

三十代後半くらいの女性教師に言われる。どうやら忙しいかで俺たちの顔も見らずに指示だけして出て行った。

「なあ、一夏最近の受験は着替えてやるものなのか？」

「さあ？ カンニング対策なんじゃないのか」

そして何の気なしに目の前のカーテンを開ける。
そこにはなんていうか『お城に飾ってある中世の鎧』がある。
もつとも、正確に言えば違う。確か・・・

「『^{アイエス}IS』・・・」

正式名称『インフィニット・ストラトス』。もともとは宇宙空間での使用を想定したマルチフォーム・スーツ。ただ、いろいろあって今はスポーツ用の飛行パワードスーツになっている。

ただし『IS』には決定的な欠陥があって俺や一夏にはあんまり関係ない。

その欠陥とは

「どうした涼介？ ん？ それ、『IS』か？」

「ああ、たぶんお前の前のカーテンにもあるぞ」

「ほんとうか？まあ、あっても・・・」

そう言って一夏も自分の目の前のカーテンを開ける。

「俺たち男には使えないんだよな」

「ああ」

『IS』は女以外には反応しない。何もできない、そのはずだ。そう思って俺と一夏は

――『IS』に触れた。

その瞬間、頭に独特の機械の起動音が響いた。

意識にこれまで知るはずもなかった情報が流れ込んでくる。

基本動作。操縦方法、性能、特性、現在の装備、活動可能時間、行動可能範囲、センサー精度、出力限界
e t c .

周囲の情報が画面に表示される。

一夏の触れた『IS』も起動している。先ほどの女性教師が驚いてこちらを見ている。

直接見なくてもすべての方向が確認できる。

視界の端に謎の丸いロボットがいるのも見える。

これが俺の、いや俺たちの日常が終わった時だった。

第二話「俺が迷子になったんじゃない」(後書き)

主人公の容姿は少しウェーブがかつた黒髪つりあがった赤い目です。

みなさん、ハーレムにだれを入れてほしいですか？

今のところシャル、ラウラ、盾無は決定です。

他に入れてほしいという方がいればメッセージまたは感想をお願いします。

期限は特にありません。

龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました。

それではまた次回。

感想待ってまーす。

第三話「生徒も先生も・・・」(前書き)

あらすじはてきとうです。

第三話「生徒も先生も・・・」

あらすじ

涼「前回を見るんだ！」

作「・・・確かにいいんだけどさ」

涼介 side

あゝ前回ゴホンゴホン、この前色々あってISを動かした俺と一夏
なんだが今

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRは^{ショートホームルーム}じめますよー」

学校に来ている。もちろん高校。それで今挨拶したのが・・・なん
だっけ？

山田山田？やまやまだ？そうだ山田麻耶先生だ。あつぶね忘れると
こだった。

「それでは皆さん、これから一年間よろしく願いしますね」

「・・・・・・・・・・」

誰からも返事がないだと。なんてひどい奴らだ。俺もしてないけど。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

「・・・・・・・・へい」

さすがに誰も返事をしないのは悲しすぎるので返事をしてみたが・
・俺もつらい。

周りの女子も一夏も誰一人返事しない。

なんとなく居心地が悪いので俺の前にいる一夏をつついてアイコン
タクトで話してみる。

（どうした一夏？学校生活は待ってはくれないぞ）

（まだ始まって一時間も経ってないけどな）

なるほど一夏はタイミングを計ってるようだ。確かに空気を読まな
いとな。

（それよりなんでお前そんな余裕なんだ？）

（はて・・・余裕じゃなくなるようなことあったか？）

（お前・・・周りを見て観ろ）

一夏に言われた通り周りをみるそして気づいた。

（知り合いが居ねえ！）

（そこかい！）

（他にあるか？）

（あのな・・・よく見ろここには・・・女子しかない）

（・・・なんだって！）

周りを改めて見回すとそこには女子一（俺と一夏を除いて）しかない。
ない。

今まで高校生活に思いを馳せすぎて気づかなかった。

（お前って馬鹿なのか？）

（否定はできない）

（おいおい、そこは・・・）

「・・・くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

おっともう「お」まで来たか。

一夏も気づかなかったようだ。声が裏返ってる。馬鹿め・・・ごめん俺のせいかな。

今も女子からくすくすと笑い声が聞こえる。まさか!

(一夏、お前笑いをとるためにワザと・・・!)

(考えすぎだ!)

なんて野郎だ。俺が甘かったっていうのか。お、なんか先生が詰め寄った。また注目を浴びやがった。

くそ、俺も何とかしなくちゃ。どうせなら俺もみんなを笑わせれる面白い子って言われたい!

「えー・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

・・・いや、普通だな。なんだ俺の考えすぎか。

おいおい他の奴から『もっと色々喋ってよ』的な視線と『これで終わりじゃないよね?』的な空気が

セットできてるぞ。どうするんだ?

・・・こっちを見るんじゃないか! ほら急がないから『もっと聞きたいなあ!』的な視線が来たぞ。

「以上です」

がたたっ。

おいおい何人かこけたぞ。何だここの教室は、押すなど言ったら押してくれそうなくらいノリがいいぞ。

パンツッ！

なんだ？一夏がいきなり頭たたかれやがった。まったくこんな風にたたくのはどこぞの姉さんだけで・・・

「・・・」

そこにいたのは黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられてるがけして過肉厚ではないボディーライン。組んだ腕。オオカミを思わせる鋭い吊り目。

「「げえっ、関羽!？」」

しまったと思ったころにはもう遅い。

パンツッ！パンツッ！

やっちゃまったぜ。マジ痛い。ちなみにこっちを見ていた女子が数名引いちゃってる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者共め」

「『千冬さん／千冬姉』どうしてここに！？」

パンツッ！パンツッ！

・・・もう俺しゃべらない。

ただ俺は職業不詳で月一、二回ほどこか家に帰ってこないから驚いただけなのに。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな。

千冬さんもあんな優しい声出せるんだな。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

・・・なんか山田先生が熱っぽすぎる声で答えてるけど・・・大丈夫か？（いろんな意味で）

「諸君。私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。

私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠^{じやっかん}十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、

私の言うことは聞け。いいな」

なんか嫌な予感がする。耳ふさご。

その途端、教室を黄色い声援が駆け廻った。

「キャ——————！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

ぬおっ！耳が、耳がああああ！！俺は確かに塞いでたはずだぞ！？
てか最後の奴、あえて言うなら世界中から来てますが！

・・・そろそろ喋りたくなってきたので気を紛らわすためにIS学園について説明しよう。

IS学園とは

確か、IS作ったせいでいろいろ混乱しただろう！お前責任とれよな！的なことを言われ作られた学園だったと思う。どんな押し付け方だよ。

以上、心の中で説明しようとか言っているおかしな人でした。と、馬鹿なことを考えているうちにチャイムが鳴った。

ショートホームルーム

「さあ、SHRは終わりだ。」

さてと・・・これからどうしよう？

女の子の中に男二人あ、一夏連れてかれた。あれは誰だ？
じゃなくて女の子の中に男一人その結果・・・

「ヒソヒソ」

「コソコソ」

孤独・・・誰か助けてくれ。

戻ってきてくれ一夏！関羽！じゃなかった千冬さん・・・

パンツ！

「失礼なこと考えなかったか」

「・・・すみません」

まだ居たんですか。

第三話「生徒も先生も・・・」(後書き)

天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございます。

この前ついに、七巻を手に入れたためやっとなの子の妹がわかりました。

それではまた次回。

第四話「同じ名前がクラスにいますと紛らわしいよね」(前書き)

タイトルに深い意味はありません。
今までも、これから！

涼「何格好つけてんだか」

第四話「同じ名前がクラスにいと紛らわしいよね」

涼介 side

今、休み時間も終わって普通？の授業を受けてるんだが

「ほとんど全部わかりません」

・・・目の前に馬鹿がいやがる。

確かに授業の内容は俺たちには知る必要がなかったから分からないが、この学園に来る前に必読で書いてあった参考書を読めば何とかなると思うが。現に俺は分かるし。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

はい次の展開わかる人挙手。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンツ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

はい、こんなことになりました。みんな分かったかな？・・・俺もおかしくなってきたかな。

そんな事より確かその電話帳もどき俺持ってきてたはずだから貸すかな。

「おい、一夏」

「ん？」

「これ貸してやる」

「おっ、サンキュ！」

「何してる織斑と織斑」

ただ参考書貸してただけでなぜ怒鳴られなきゃならんのだ。それに織斑二人いますからね、あなた合わせると三人ですよ。

それは置いといて俺は、ただの親切心で貸しただけなので怒られる気はない。

「織斑先生、俺はただ織斑君に参考書を貸してただけです」

「そうです、織斑先生。織斑から参考書を貸してもらおうとしただ

けです」

「うるさいぞ、織斑と織斑」

・・・織斑織斑うるせえ。ほら山田先生なんか頭から軽く煙が出るぞ。

確かに俺が最初に言ったけど何もあんた等まで言わなくていいだろ。

「話が進まん。貴様ら黙ってろ」

ごもつともです。というわけで

――――
数十分後――――

・・・いいのかこれ？

今また休み時間になった。今度は一夏を連れて行かれなかったから何とか孤独じゃない。寂しいけどね。

「ちょっと、よろしくて？」

「「へ？」」

ん、なんだ？見るからにお嬢様って感じの人が話しかけてきたぞ。

「訊いてます？お返事は？」

「駄目です」

「おいおい」

一夏が止めてくる。だってよろしくないからさ。

「まあ！なんですよ、わたくしが折角話しかけて差し上げましたのに。たとえ用事があるうとも私の話には耳を傾けるべきでなくって？」

「悪いな。俺たち、君が誰だか知らないし」

一夏が割と丁寧に断っているが・・・

「一夏、俺知ってるぞこの人」

「え、そうなのか」

「確かセシリア・オルコットさんだったかな？」

俺は割と真面目に話を聞いていたからな。偉いんだ。

「そうですね。イギリスの代表候補生にして、入試主席のわたくしセシリア・オルコットは覚えていたほうがいいですよ」

代表候補生・・・入試主席・・・？何だっけ？またあとで調べとくか。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求にこたえるのも貴族の役目ですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。

何人か椅子からこけた。え、なに常識だった？良かった訊かなくて。

「あ、あ、あ・・・」

「『あ』？」

何だ壊れたのか？

「あなたッ、本気でおっしゃってますの!？」

「おう。知らん」

うん。見栄を張らないことはいい事だぞ一夏。

「信じられない。信じられませんわ。極遠の島国というのは、今まで未開の地なのから。常識ですわよ、常識。テレビが無いのかしら・・・」

場所によって常識は非常識となる b y たぶん俺
あと、テレビはあるぞ。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。・・・あなた単語から想像したらわかるでしょう」

「そう言われればそうだ」

「そうだぞ、一夏。要するに代表のなりそこないだ」

「おお、なるほど!」

候補どまりなんだしそうなんだろう。

「エリートと言ってますでしょ！わたくしは入試で唯一教官も倒したんですのよ！！」

「俺たちも倒したぞ」

確か一夏は教官が壁にぶつかって、俺の時は天井にぶつかって・・・
ドジだな。

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・？」

「いや、知らないけど」

「興味がないしな」

「あなた達も教官を倒したって言うの！？？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？？」

「おそらくって意味だと思うけど」

たぶんの意味も知らないわ。

「そういう意味ではなく！」

キンコーンカーンコーン。

チャイムか。普段は嫌な音だが今はうれしく感じるのだから不思議だ。

「っ・・・！またあとで来ますわ！」

正直来ないでほしいが。

でこの後なぜか千冬さんが教壇に立っていた。まあ、大したことじゃないけど。

でクラス長とやらを決めるそうなんだが。

「はいっ。織斑一夏君を推薦します！」

「私は織斑涼介君を推薦します！」

何だって！そんなめんどくさそうなこと俺はしたくない！

「はい先生！俺も織斑一夏を推薦します！」

「何やってんだお前！？織斑涼介を推薦します！」

くっ、一夏！貴様抵抗する気か！

「じゃあ候補は織斑達でいいか？」

「駄目です！」

「許してください！」

「静かにしろ織斑。選ばれた以上は覚悟をしろ」

これが真面目だからと言って代表にされる人の気持ちか……。あと、ついに二人まとめて織斑だけになっちまった。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

そこでさっきのオルコットさん登場。何だ助けてくれるのかと思いきやその口から出るのは人を馬鹿にした言葉の数々そこで一夏が言い返しなんやかんやで決闘するだのなんだのなったのだが……

「俺はしないぞ」

「なんでだよ？」 「なんですの!？」

いや勝手にケンカしたくせに人を巻き込むなよ。

「あえて言うなら見苦しいぞお前ら。オルコットさんは人の祖国を馬鹿にするのはいいけど、そんなに騒いでたらイギリスの人はみんなそうなのかって誤解されちまうぞ」

「くっ、確かにそうですわね」

「一夏、お前はガキか？あのくらい我慢しろよ」

「・・・そうだな」

「どっちが強いとかすごいとかなら代表決めるついでに戦って決めるよ」

「そうですわね」 「そうだな」

よし止まった。

ふ、これでちゃっかり俺は代表候補から抜けたぜ。
ついでに千冬さんからの『おい涼介。お前がこいつらをさっさと止めろ』なんて言うし視線から解放されたぜ。

ただ、代表にはなりたくないけど・・・俺もISで戦いたいな。

そう俺は思っていた。

それから数日。その間にいろいろあった。

部屋を割り振られたり（なぜか俺と一夏の部屋が違って俺は一人だったが）

篠ノ之箒っていう人を紹介してもらったり（一夏のファースト幼馴染らしい）

箒さんはなんかすごい人の妹らしかったり（俺はよく知らない人だけ）

・・・一夏が専用ISをもらえることになったり。
俺は分からない。千冬さんによると俺のことは何も言ってこなかったらしい。

別に悔しいなんて思わない。むしろ目立たなくてよかったと思う。
ただ目標が果たせないのは残念だった。
そう思っていた。しかしそれは間違いだった。

なかなか一夏の専用ISが来なく待っていたとき。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

「落ち着いてください。山田先生」

「どっちのですか？」

「どっちもです！」

はて、俺は呼ばれるような事したか？

「ISが届きました！」

「おお、良かったな一夏」

「ああ」

「涼介くんのもです！」

はい？

「今なんて？」

「だから、涼介くんのISも届きました！」

えっ？

「とにかくあっちにいる方のところに行ってください」

えっ？えっ？

「ほら行って来いよ涼介」

「早くしろ、織斑」

えっ？えっ？えっ？

もう訳が分からずとにかく言われたところに行った。そしたらそこには

「やっと来たか」

「なんで・・・」

神様がいた。

「俺まだ死んでないぞ？」

「人に会って第一声がそれはどうかと思うんだが」

第四話「同じ名前がクラスにいと紛らわしいよね」(後書き)

龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました。

涼「俺もIS貰えるのか？」

それが、神様が言ってた特殊な力だと思う。

涼「作者のくせに分らないんだ」

うるさい！自分の名字で遊んでたくせに。バカ！

涼「それではみなさんまた次回！」

え、いきなり！？

涼「感想、評価待ってます！」

ま、ま

第五話「試練とかめんどくさくね？」 (前書き)

週一更新めざします！

「まあ、頑張れ」

・・・当麻と違って優しい

第五話「試練とかめんどくさくねっ」

あらすじ

「神様が何か居た」

「アバウトな説明ありがとう」

涼介 side

・・・おいちょっと待て。なんで神様がここにいるんだよ。まさか・・・俺死んだ？
なんてひとり不安になっていると、神様・・・いや死神が笑いかけ
てくる。

「誰が死神だって？」

「じゃ悪魔か？」

「・・・悪魔でいいもん！」

「予想以上にキショイ！」

「悪かったな!!」

悪魔、死神、魔王ってどれが強いんだろうな？
そんなくだらない事はごみ箱に捨ててといて

「で、なに用件は？俺、これから試合観たいんだけどさ」

「ああ、大したことじゃないが」

ふむ、大した事じゃないなら逃走するか。全力で走れば逃げ切れる
だろ。

「ほら、力をやるって言ったろ。その力を渡しに」

ふむ、大した事に感じるのは俺だけだろうか？

「まあ、そりゃどうもわざわざ」

「で、力なんだが・・・」

ニヤニヤ、した笑みでこちらを見てくる神様。うんキシヨイ。

「太陽炉をやろと思う」

「太陽炉・・・？」

はて何だろ。個人的には幻想を殺せる力が欲しかったな。

「ああ、そっちはもう書いてるから」

「？」

「気にするな」

気にするなと言われたら気にしないけど。

「太陽炉って何？」

「お前・・・知らないのか？映画にまでなったあのガンダムを」

ガンダム？なんじゃそりゃ？俺は知らない

「あっそうか。この世界では無いのか。そりゃあ、この世界で男の夢を叶える訳ないしな」

「一人で納得されても困るんだが」

「えーとどこまで・・・あ、そうだと太陽炉か。なんて言うかなGNドライブ、半永久エネルギー機関とでも言うかな」

「なんか凄そうていうのは分かった」

「まあ、今はそれでいいか」

仕方がないなく、みたいな感じで首振ってやがる。・・・一発でいいから本気で殴らせてくれないかな？

「お前にそれを搭載したISをやる。好きなの選べ」

そう言ってどこから出したのかバスケットボールぐらいの球体を五つ差し出してくる。じゃあ・・・

「これ」

「全部を盗るな」

人聞きが悪い。好きなのといったから全部選んだだけだ。そこで考えるしぐさをする言う。

「・・・じゃあね、全部やるよ」

「最初からそうしろよ」(ぼそぼそ)

「さて帰るか」

「ごめんなさい！自分調子乗ってました！」

「分かればいい」

偉そうに何をい「考えをよめるって言ったろ」自分調子乗ってたっす！！

「ただし条件がある」

「まさか・・・現金！？」

「なんでそうなる・・・」

「子供から金とるなんて、サイテー！！」

「よし、もう無視するからな。条件は俺が指示する機体に乗ってこれまた俺が指示した機体と戦ってもらう。それに勝てばいいものが手に入り、負ければその時は「現金！？」何も手に入らない。分かったか」

「分かった。で相手は？」

そろそろふざける気も無くなってきたので真面目に聞く。

「もう用意してある」

「ISは？」

「それも用意済みだ」

「どれ？」

「それ」

指をさしたほうを見るそこには・・・

「これ・・・IS？」

「立派なISだ」

そこにあつたのは先ほどの球体・・・どうしろと？。

「これは？」

「お前が乗る機体だな」

「なあ、これ人間が乗れると思うのか？」

思うなら、いい病院紹介するけど。

「ホイパス」

そう言いながら球体を投げてくる。
するとそれが光り始めて

「えっ、ちよつと、何これえええ!？」

キャッチすると

「・・・何これ？」

俺の体が機械に包まれていた。

・・・普通は自分で乗り込むものはずなんだが。専用機も最初は自分でだし。

しかも右手には射撃系武器、左手には楯がついている。
いきなりすぎてもうビックリ。

「説明しようか？長くて難しいけど」

「謹んで遠慮させていただきます」

神様パワーとでも思っておこう。

「どうだ？」

「何が？」

「おかしい所はあるか？」

「特にはないかな」

「ならいいが」

あえておかしいと、言うなら装備の仕方が。

装甲が俺の体にあわせようと動く音が聞こえる。

俺は軽く何も持っていない左腕――（シールド装備）を動かす。

「ん、なんか反応が鈍いような・・・」

「そうか。ハロ、調整開始」

「ハロ？何それ？」

「気にするな・・・よしこれでどうだ」

「んー・・・大丈夫」

そして今度は足を一步、踏み出す。まるで自分の体のようだ。そうだ

「あゝゴホンゴホン。・・・こいつ、動くぞ！」

「・・・お前、本当にガンダム知らないのか？」

「知らない」

「まあいいけど」

「武装は？」

「お前のISに聞け」

「ぶっつけ本番ですか、俺の得意分野ですな。じゃあ頑張りますか」

「応援してるぞ」

「じゃあくれよIS」

「それとこれは別」

そのまま歩いて、ピット・ゲートに向かう。

第五話「試練とかめんどくさくね?」(後書き)

あとがきコーナ

涼「神様うざい!」

作「次回バトル頑張ってね」

涼「おうとも!」

作「龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました」

涼「ではまた次回!」

第六話「初バトル!・・・やりたくねえ」(前書き)

ヒロイン募集終了です。

涼「誰にするんだ？」

鈴、シャル、ラウラ、楯無、簪ですかね。

涼「あれ?のほほんさんは？」

・・・すみません、無理そうです。ホントすいません。

涼「・・・感想をくれた皆様ありがとうございました」

第六話「初バトル!・・・やりたくねえ」

涼介 side

「で、戦いにきた訳だが」

あれ? 目が悪くなったのかな、二機いるように見えるよ?
なぜだか剣を持った白いのと、銃を持った青いのがいるような気がする。

〈あゝ、マイクテスマイクテス、誰も一機とは言って無いからな〉

神様が放送を入れてくる。つまり・・・

「初めての戦いで二対一をしなければならんのですね」

〈理解が早いな〉

そうこうしてる内に一機が近づいてきた。

〈頑張れよ〉

「早い！もうちょっと説明を・・・くそ！」

前から来た一機に向かって右手に持っていた銃の引き金を引く。しかし

「当たらねえ！」

巧みな回避行動とでもいうのだろうか、数発撃ったのだがかすりもない。

〈当たらなければ、どうということはない！〉

神様がなんか言ってるが無視だ。

そのまま、剣を振りかぶりながら突っ込んでくる。

「させるか！」

その剣の軌道に盾をだし、何とか防ぐも

「な！？」

そのまま弾き飛ばされる。

何とか体勢を立て直し壁の手前で止まる。

そこで、追撃に備えて顔を上げた。

すると目の前には

「勘弁してくれよ・・・」

ビームが迫っていた。

すぐに、シールドを掲げて防ぐ。

二射、三射と続く狙撃を何とか防ぐ。

しかし、先ほどの剣、狙撃のダメージが大きかったせいかシールドからおかしな音が聞こえ始める。

「ああ！ちよつとストップ！盾が壊れちまう！！」

そんなこと言っても敵が待ってくれるはずもなく、また白いのが突っ込んでくる。

もう壊れてもいいやと開き直り敵の振るう剣をシールドでうけ・・・止められなかった。

《マカセロ、マカセロ》

「え？」

しかし、体に当たった訳ではない。
謎の声が聞こえたと同時に体が勝手に動いてよけたのだ。
だからと言って無事じゃなかった。

「任せろ言うならちゃんとやってくれよ、誰か知らない人！」

今自分が使える唯一の武器、ライフルを壊された。
これで、おそらくOガンダムに遠距離系の武器はないだろう。

「どうすんだよ・・・あの青いののところまで行けってか」

この間も敵は攻撃してくるがそれを大きく機体を動かすことで避けている。

味方が近いためか青いのの狙撃も来ない。
俺はとにかく、何か戦えるものを探す。

「武装は!?!」

――左腕部にガンダムシールド装備

「知ってる!」

――背部に一基ビームサーベル装備

「それだ！」

手を背中にやり、つかを握って前に振り斬る。
当たらなかったが何とか引き離すことに成功した。
そして、空いた距離を縮められないよう全力で離れる。
しかし、白いのも近づこうと再度突っ込んでくる。
だが

「思った通りだ！」

俺も一気に距離を詰め、サーベルを上から叩きつけようとする。
敵も両手で持った剣を横にして防ごうとするが。

「甘いんだよ！」

右手のビームサーベルが相手に届くよりも先に、相手の手を左手の
シールドで上に引っ掛けるようにして跳ね上げる。
そのまま、右手のサーベルで縦に切り裂こうとした。だが

――後方注意

ガン！

「な!？」

警告と背中への衝撃がそれを遮った。

「なんだ!？三機目か!？」

回転を中断、横に全力で移動し後ろを見るとそこには小型の飛行物体。

「・・・何このめんどくさそうなもの」

―――――特殊兵装『ブルー・ティアーズ』四基確認

「まさかの六対一ですか」

そして一気にすべての『ブルー・ティアーズ』が俺を囲み射撃を開始する。

「ま、じ、かよ!」

一射、二射、三射、そこまでは無理やり体を動かして避けきつたがそこまでだった。

「くそ！」

四射目をシールドで受けたせいで動けなくなった。

そこから、集中砲火を受けどんどんシールドエネルギーが減る。このままじゃ負けるだろう。

「そんなの嫌だ！」

負けず嫌いと言えはいい。それでも勝ちたい、いや力が欲しい。そう願った。すると

《チカラ欲シイ？》

体が勝手に動いたときと、同じ声が聞こえた。答えは決まってる。

「欲しい！」

《アゲル、アゲル》

俺が叫んだ瞬間、俺の体は光った。
そして、俺の姿は・・・

「鏡がねえから分かんねえや」

《マヌケ、マヌケ》

「よし出てこい、ぶっ飛ばしてやる」

ゼウス side

あの転生させた少年に試練のようなものを受けさせているのだが

「予想以上にやるな」

確かに土壇場に強いようだがそれだけじゃ説明できない何かがある。
可能性があるとすれば

「ああ、なるほど」

まったく、————がもう手を貸すとわな。

そのうち他のも出てきそうだが……。まあ

「面白ければいいか」

少年を見る。

そこには、先ほどとは違う青と白が基調とされたガンダム……。エクスシアがいた。

涼介 side

○ガンダムの姿が変わってから場の流れが変わった。
いや正確には

《ミギ、ミギ》

「あいよ！」

この謎の声に従うようになったからだろう。
おそらく最初の失敗は俺が違うように体を動かそうとしたから。
それに気づいた俺は、この謎の声に従うように体を動かす。

「次は！」

《ウエ、ウエ》

「ホッ！」

横に振り抜かれた剣を跳んでかわす。
そしてできた一瞬の隙。そこに

《イマ、イマ》

「オラアアア！！！」

全力で右腕に装備された剣を叩き込む。
そして敵機は両断・・・って両断！？

「おいマジかよ！中の人はい！？」

《ヒトゴロシ、ヒトゴロシ》

「シャレになんねえよ！」

へ大丈夫だ、人は乗ってない。気づいてなかったのか？

《ヤッパリマヌケ》

「うるせえ、えい!?!」

一機倒して気を緩めたのもつかの間、もう一機の射撃がとんでくる。

「くそ! こいつの武装はなんだ!?!」

《ソレヨリコッチ》

「どっち!?!」

《アッチ》

「だからどっち!?!」

くだらない漫才をしてる間にまた、機体が光りだす。

「な!?! 一次移行!?!」
ファースト・シフト

ファースト・シフト
一次以降自体は驚くことじゃない。

さっきのこの機体のようにISならどれだってなる筈だ。だが

「さっきも、なったはずじゃ・・・」

そこが問題だ。普通ISは一次以降ファースト・シフトが起きたら次の機体の変化は第二形態以降しかないが・・・

〈第二形態移行じゃないぞ〉
セカンド・シフト

らしい。なんて言うか・・・

「神様スゲー」

《スゲー、スゲー》

〈だろ！〉

そして、新しくなった機体の武装を確認しようとするが・・・

「うわっ！また来た」

《ブルー・ティアーズ接近》

「どうすんの！？」

《フルシールド、フルシールド》

「じゃあそれで！」

すると、機体左右にあった緑のパーツが前に出てきて攻撃を防ぐ。
なんて言うか・・・

「・・・もっと早くに教えてくれない？」

《オヤクソク》

「さいですか。で武装は？」

《GNスナイパーライフル》

「俺撃てないんだけど」

さて、どうしよう？ 無駄な鉄砲数うちや当たるって言うけど・・・

《マカセロ、マカセロ》

「そういうけどミスってるんだよな」

《一緒ニスルナ》

「違うって言うのか？」

《チガウ、チガウ》

「じゃあ名前は？」

《ハロ、ハロ》

「よし、じゃあハロ」

ここからは俺は回避に専念する。狙うのは・・・

「お前が狙い打て！」

《マカセロ、マカセロ》

ハロだ。

ゼウス side

少年が決断してから決着がつくまではそう時間がかからなかった。
少年がGNフルシールドを跳ね上げ、
動き出したのと同時に少年が操縦するIS・・・デュナメスの上半
身、

GNスナイパーライフルを保持した両手がまるで別の生き物のよう
に動きだし、

敵のIS・・・ブルー・ティアーズを撃ち抜いた。
要するに、

「あの少年の勝ちだな」

まさか、もうハロがなつくとは。それに

「ハロに射撃させるとは」

俺も思いつかなかった。

確かに、そこいらの子供よりは精度は高いはずだ。

それを考え付いたあの少年はなかなかすごいだろう。
だが

「テストの本当の内容を言ったらどうなるかな」

それを告げた時の少年の表情を考えながら俺は少年のもとへ行く。

主人公&I S設定（前書き）

今回は設定のみです。

随時更新のためそのうちネタバレが乗るかもしれません。

気を付けてご覧ください。

感想をくださった皆様ありがとうございます。

主人公&IS設定

・ 本名……織斑（おりむら）
涼介（りょうすけ）

・ 年齢……15歳

・ 性別……男

・ 身長……162センチ

・ 体重……49キロ

・ 容姿……ウェーブがかかった黒髪

〔備考〕

- ・ 一夏とは義理の兄弟
- ・ 身体能力は上の中
- ・ 箒とは知り合いでないが鈴とは知り合い

ですかね。

涼介

「どこぞの主人公にそっくりだな」

まあ、気づく人はいないだろうけど。

涼介

「次は？」

IS 設定

IS 設定

〔待機状態〕

・ハロ（丸い球体）

〔備考〕

- ・全部で青、緑、オレンジ、紫、白のハロがいる
- ・1つのハロにGNドライブが一つ組み込まれている
- ・一つのハロにつき基本一体のISのデータが組み込まれている
- ・大きさは変更可能
- ・訓練モードというものがある

〔初期設定〕

〈名称〉

- ・Oガンダム

〈装備〉

- ・ビームガン
- ・ビームサーベル
- ・ガンダムシールド

〈登録ハロ〉

- ・白ハロ

〔二次以降〕
ファーストシフト

〈名称〉

- ・ガンダムエクシア

〈装備〉

- ・GNソード

右腕装備

刀身を折りたたみライフルモードに変形

可能

- ・GNロングブレイド・GNショートブレイド

腰部装備

ラッチに掛けたまま回転可能

- ・GNビームサベル・GNビームダガー

両肩後部に二基、腰背部に二基装備

パイロットの操作により長さを変更可能

- ・GNバルカン

両手首付近装備 1門ずつ内臓

・GNシールド

左腕部装備

持っている

小型で先端が打撃に適した鋭さを

〈登録ハロ〉

・青ハロ

〈名称〉

・ガンダムデュナメス

〈装備〉

・GNスナイパーライフル

肩部装備

遠距離射撃に適したビームライフル

・GNビームピストル

両ふくらはぎのホルスター

れる

拳銃型ビーム砲、連射性と取り回しに優

・GNビームサーベル

腰背部のGNバーニア側面に2基

パイロットの操作により長さを変更可能

・GNミサイル

腰部フロントアーマー内に計16基、両膝部に計8基

・GNシールド

左肩に一基、フルシールド時は両肩に一基ずつ

・GNフルシールド

両肩のアタッチメント

大型で全身を攻撃から守る

〈登録ハロ〉

・緑ハロ

〈名称〉

・ガンダムヴァーチェ

〈装備〉

・GNバズーカ

両手持ち兵装

主兵装の大型ビーム砲

・GNキャノン

背部に二基装備

可動式の二連装ビーム砲塔

GNファイ

ルド発生装置も兼ねている。

・GNビームサーベル

ナドレの両膝装甲内

通常のビームサーベルと同等の物

〈名称〉

- ・ガンダムナドレ

〈装備〉

- ・GNビームライフル

高出力ライフル

接近戦用に銃口からビ

ームサーベルを発生可能

- ・GNシールド

細身のシールド

取り回しに優れる

〈システム〉

- ・トリアルシステム

あらゆる電子機器の操作を乗っ取れる。ただしISの場合は一体ずつ

〈登録ハロ〉

- ・紫ハロ

こんなもんでしょう。

涼介

「後は？」

本編に出たらってことで

涼介

「次は？」

オリジナル解釈

オリジナル設定

・ハロに積まれているのはあくまでも太陽炉のためISのコアとは違う

例) シールドバリアが装備されていない

代わりに人体と装甲の間にGN粒子が入れられ、衝撃などから身を守る

・ハロに機体の操作をさせる事が出来る

例) 自分は攻撃をし、ハロに機体制御をさせる

・ほとんどの装備は装甲から撤去可能

例) GNフルシールド

・GN粒子を高密度に放出すると電子機器を妨害することが可能

みたいな感じです。

涼介

「随時更新していきます」

それでは

第七話「本当の試練って・・・」(前書き)

今回あとがきで質問があるので答えていただけると嬉しいです。

涼「では本編へどうぞ」

第七話「本当の試練って・・・」

涼介 side

ハッハッハ！

まったく・・・

「な〜に言っちゃってんだか」

《ダカ、ダカ》

「すみません・・・でした」

今の状況？神正座、俺それにライフルで照準あわせてる。
何でこうなったか？よし教えてやる。
理由はな、テストの条件なんだよ、なんだと思う？
実はな

「ハロとの会話なんて」

この神様の話によると

ハロは認めたやつにしか話しかけない

←

俺話しかけられた

←

ハロ認めた

←

俺合格

みたいだったらしくて、つまり・・・

「あの二機は倒さなくてよかったと？」

「ホントすいません」

《マセン、マセン》

まあ、いいけど。
楽しかったし。
けどさ・・・

「何この状況？」

「さあ？」

《サア、サア》

《サア、サア》

《サア、サア》

《サア、サア》

《・・・・・・・・》

これで分かっただろう、俺の状況。
なに、分からない？仕方ない分かりやすく言うと・・・

「うっせえ！」

《ウ「言わせねえよ！」》

青、緑、オレンジ、紫、白のハロの囲まれてる。
騒がしいのなんのって・・・ん？

「白いの」

《・・・・・・・・》

喋らない・・・真面だ！

「よし、神様俺こいつにする！」

静かなのが一番。

「・・・全部持っけ」

「なぜに？」

「懷かれてるじゃねえか」

ふう、まったく・・・

「いい眼科紹介しようか？」

「なぜだ!？」

絶対目がおかしい!これが懷かれてる?嘘だ!

「それにもうエクシアもデュナメスもお前は使ったんだ」

「?」

「要するに貰ってけ泥棒!」

「嫌だ!」

「はあ、仕方ない弱みに付け込むなんて嫌なんだが・・・」

そこで、急に真面目な顔を神様がする。

「わざわざ生き返らせてやったんだ、だから代わりにこれを貰え」

そう言われると弱い。

第二の人生を歩める代わりにこいつらを貰えって・・・しかも俺の力になってくれる。

こっちのマイナスは騒がしいだけ、なら・・・

「・・・仕方ねえな」

「よし交渉成立」

「で俺自由？」

「ああ、用事か？」

「ちょっと行くところがな」

もちろん行くのは一夏のところ。あいつはどうなったか心配だ。

「じゃあ、ハロ縮小」

《了解、了解》

するとハロがまた光って・・・ストラップになった。
・・・スゴ。

「持ち運びしやすくなっただろ」

「俺はてっきり転がして移動かと思ったよ」

「じゃあな」

「おう」

そして走る俺。



まず・・・一夏負けたんだって。
そんで一夏のISは『白式』あの騒がしかったセシリアのが『ブル
ー・ティアーズ』って言うらしい。

それから、俺が戦ったのはこの二機らしい。
それからクラス代表は・・・

「では、一年一組代表は織斑涼介くんに決定です。頑張ってくださいね」

「「わー！ー！！」」

パチパチパチ

「ってなんでだおい！」

なんで俺？織斑違いだろ？
そこで一夏が説明を入れてくる。

「それはだな、お前も専用機持ちになったんだろ。なら・・・」

「涼介さんも入れて三人で決めた方がいいという結論になりました・・・」

「この前の授業で見事この二人を静かにさせたお前が適任だと決まったわけだ」

一夏、セシリア、箒の順で話をされる。

一夏め、もうハーレム作りやがって。モテモテだな混畜生！

「それに、千冬ね・・・織斑先生の推薦もあったし」

「先生？」

もうなに？新手のいじめ？

そう思いながら首を千冬さんの方に向ける。

「いじめとは失礼な、前回お前がこいつ等の口論を止めたのは紛れもない事実だろう」

「それは先生が・・・」

「事実だろう」

要するに・・・

「謀ったなシャ○！」

「誰が赤い彗星だ」

そこで飛んでくる出席簿。だが

「一夏とは違うのだよ、一夏とは！」

避ける、が

ガッン！

「甘いな」

「ぬおおおお」

出席簿は四で本命は拳だと・・・

「やるな、ブライ〇」

「山田先生ついでに雑用係にでもしておいてくれ」

「すみませんでした！」

「よし、異論があるやつはいるか？あるなら言え、聞くかは知らんが」

ここで異論が出ればいいのだが・・・出ない。

「ではクラス代表は織斑涼介で決まりだ」

くそ、いつか見返してやる。

鬼、悪魔・・・いい年してあのセリフ言わないよな。

ギロリ！

な！読心術？化け物かこいつは！

パンツ！

化け物でした。

こうして俺はクラス代表になったとき。

第七話「本当の試練って・・・」(後書き)

あとがきコゝナ

涼「で質問って？」

作「なんて言うか・・・ダブルオーの敵機出したほうがいいのかなって思っ」

涼「それだけか？」

作「出すならファーストシーズンのどの敵機を出してほしいかも」

涼「というわけなのでよければ答えてやってください」

涼「なんで俺がクラス代表なんだ？」

作「いや、鈴にフラグを・・・なんでもないです」

涼「・・・月のない夜は気をつけな」

作「何それ！地味に怖い！！」

涼「それではまた次回！」

作「感想まってまゝす」

第八話「日常？」（前書き）

ダブルオーから敵出します。

敵はとりあえずもう決まっています。

なので前回の質問？は締切りです。

では本編へどうぞ！

第八話「日常？」

涼介 side

「ではこれよりISの基本的な飛行訓練を実践してもらおう。織斑、オルコット、織斑。ためしに飛んで見せろ」

現在千冬さんの授業—（in屋外）を受けている。

・・・そんなに弟を名前で呼ぶのが嫌かねえ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

熟練してないんだけどな。

そして俺は腰から青ハロを手取る。

俺のIS—（正式名称は聞いてない）はストラップである。

なので俺のISスーツには腰にかける用の部分がついている。以上説明終わり。

「行くぜハロ」

《了解、了解》

ちなみに俺がISを貰った理由は、研究者に知り合いがいてその研究者の実験を手伝うという名目で

五つのコアを持っていることになっている。

もちろん研究者は神様の事だ。説明 part 2 終わり。

そして右手に持ったハロを軽く上に投げる。

するとハロが光りだし再び手に戻ってくるときは俺の体に光が集まり・・・

「ハロ異常は？」

《ナシ、ナシ、エクシア正常》

「りょーかい」

展開終了だ。ホントは腰につけたままできるけど。

ISの名前だが青いのがエクシア、緑がデュナメスらしい。

横で一夏とセシリアもISを展開している。

「よし、飛べ」

そう千冬さんが言ったと同時にセシリアが急上昇、そしてはるか上空で静止した。

俺らはというと・・・

「何をやっている。スペック上の出力ではお前らの機体の方が上だぞ」

「そう言われても・・・」

「自分の前方に角錐をつて、なんだよ」

ゆったら飛んでいた。

いや、『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で飛べるらしいが・・・わかんね。

それに俺のISはちょっと勝手が違うらしい。詳しく知らんが。

「一夏さん、涼介さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そうか、さすが代表候補生。なり損ないなんかじゃないな」

「分かっていただけで何よりですわ」

前回、一夏と戦闘してからセシリアの態度は柔らかくなった。それに、一夏のコーチもしているらしい。これは・・・

「惚れたな」

《ホレタ、ホレタ》

「な!?!?!」

「ん?」

どうやら凶星のようだ。どうだ俺の勘。
しかし一夏狙いはまだ居るので・・・

「一夏っ!いつまでそんなところにいる!早く降りてこい!」

うむ、箒が山田先生からインカム奪って叫んでる。
スゴイなハイパーセンサ!

「織斑、オルコット、織斑、急降下とと完全停止をやって見せろ。
目標は地表から十センチだ」

「了解です。ではお先に」

そう言ってセシリアはぐんぐん小さくなっていく。どうやらクリア
ーしたらしい。

「上手いもんだなあ」

「じゃあ次お前な」

「分かった」

そして、一夏が急降下・・・したのだが、

ギョーンツ——————ズドォオンツ！！！！

「あゝあ、力みすぎだな」

《リキミスギ、リキミスギ》

落下という方が正しいだろう、グラウンドに大穴をあけてる。
そんで千冬さんに怒られてる・・・ファイトだ一夏。
で次は俺の番なんだが、

「・・・自信ねえ」

とはいってもやらなきゃいけないんだから

「ハロ、頼む」

え、人任せ？何の事？ハロはロボットだよ。
まあ、ともかくハロに任せて無難に済ませた。



「織斑君、クラス代表決定おめでとう！」

「「「おめでとう！」」」

パン、パンパン、スカ、あれおかしいな？

クラッカーの音に交じって不発の音がするが無視だ。
というかどうしてこうなった？ああ、千冬さんにはめられたんだ。
後ろには『織斑涼介クラス代表就任パーティー！！』なんて書いてある。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑涼介くんインタビューしに来ました！」

おくと一同盛り上がる。俺は盛り下がるけどな。

「あ、私は二年の黛薫子。まゆずみかおるこよろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

そして渡される名刺、画数多いな。

「ではではズバリ織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「俺を推薦してくれたみんなのため頑張るとでも書いといってください
い」

「うーん、ふつー」

「じゃあ、死ぬぜえ・・・俺の姿を見た者はみんな死んじまうぞオ」

「いやそれダメだろ」

「よし、採用！」

「え!？」

一夏がなんか言ったが無視。どうせ適当にねつ造するんだろ。
その後俺は普通に部屋に戻って・・・

「よし、ハロ訓練開始だ」

《ターゲット設定、ターゲット設定》

「狙い打つ！」

ISを展開、ハロに聞いた訓練用のモードで訓練をしましたとき。

「撃墜率は？」

《・・・・・・》

「なぜ黙る？」

《ゼロ、ゼロ》

「知りたくなかった！」

第八話「日常？」（後書き）

あとがきコーナ

涼「日常だな」

非日常でもある。

涼「天照大神さん、SILVERさん、龍賀さん、感想ありがとうございます！
ございました！」

次回は涼介の寝不足時の言動が・・・

涼「また次回！」

第九話「転校生はセカ・・・ファースト幼馴染」(前書き)

涼介の寝起きは、思考能力そのまま。会話能力低下です。

第九話「転校生はセカ・・・ファースト幼馴染」

一夏side

昨日パーティーがあつたが俺はあまり夜更かしとかしないタイプなのですぐに帰って寝た。

そして、今日も普通に授業があるので教室に来たのだが・・・

「あれ、涼介は？」

「えゝまだ来てないよゝ」

クラスの女子が答えてくれる。

あいつはしっかり者だから遅刻とかしないと思うけど・・・

「それより一夏君！涼介くんって強いのか？」

「ん？」

最近は涼介と名字が被るので名前で呼ばれてる。

「なんで？」

「いや、もうすぐクラス対抗戦だし・・・」

「ああ、なるほど」

あいつの強さか・・・

「俺より体力はあるぞ」

俺が受験勉強してる間も、運動しまくってたからな。

「あ、そうそう転校生の話聞いた？」

「転校生？」

はて、この微妙な時期にか？

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだって」

「へ」

「そんな事より一夏さん。今日の放課後の訓練どうしますか？」

セリシアが話しかけてくる。え〜と、そうだ

「涼介も誘ってみるか。あいつはクラス代表選があるし」

「確かにどうせやっていたくなら、勝っていたいただいた方がいいですものね。・・・二人つきりになれないのが残念ですけど」

ん？最後の方が聞こえなかったけど。

「でも今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

う〜ん油断大敵って言うんだけどな。
そう俺が考えていると・・・

「————その情報、古いよ」

教室の入り口から聞きなれているような、聞きなれていないような声が聞こえる。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で

きないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に來たってわけ」

懐かしいな、昔よく遊んだもんだが

「あれ、涼介は？」

「ああ、それが……あ、そこ」

「どこ？」

「後ろ」

「え、キャア！」

その鈴の後ろに眠たそうに眼をこすりながら涼介がたっていた。

涼介 side

ヤバイ、命中率ゼロパーがショックで練習してたら全然寝れなかった。

ヤバイ・・・眠い・・・そう思いながら教室に行くと

「————その情報、古いよ」

っという声が聞こえた。・・・誰だっけ？考えられないくらい眠い。取り合えずそこを通らないと教室に入れないのでゆったら歩いていく。

「後ろ」

「え、キャア！」

こちらを向かれて驚かれるが、ビックリしたのはこっちの方だ。

「アンタ、いるならいるって言いなさいよ！」

「ムニユ、スイふぁゝ、セン」

「完全に寝起きだな」

「ふあい」

・・・駄目だ、真面に喋れない。

「ちゃんとアタシの事覚えてる？」

・・・確か

「ぼくりよくしょーじょ」

「殴られたいらしいわね」

「しゅみマセン」

・・・間違ってないと思うけど

「おい」

・・・後ろから声が聞こえた。

「ふぁい？」

「なに！？」

バシンッ！・・・はっ、寝かけてた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「千、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、道をふさぐな。邪魔だ」

「す、すいません・・・」

「織斑涼介、お前もさっさと席につけ」

「ふぁゝい」

・・・眠い。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、涼介！」

「またにゃ、鈴」

「アンタ、ちゃんと覚えて・・・」

「早く帰れ」

「はい！」

それが俺と鈴の久しぶりの出会いだった。



「ほら涼介、起きろ」

「ん？」

「昼飯食いに行くぞ」

どうやら俺は授業を全部寝てすごすという自殺行為をしたらしい。

「・・・俺は千冬さんの授業で寝て、生きてるのか・・・」

「お前は千冬姉をなんだと思ってんだ？」

「化け物」

「あ、千冬姉」

「さて昼飯！」

そんで一夏と共に学食に移動した。
そして俺はあることに気づいた

「学食のラーメンに豚骨がないだと・・・」

「あ、ないメニューもあるんだな」

「・・・俺も日替わりでいいや」

「いいなら言うなよ・・・」

そして食券を買って出そうとしたら

「待ってたわよ、涼介！」

どーん、と俺たちの前に立ちふさがったのは噂の転入生、ファン・リンイン 凰鈴音だ
った。

愛称は鈴だ。りん

「お、ラーメン。やっぱり俺もラーメンにするべきだったかな」

「一年ぶりに会った相手に対しての第一声がそれってどうなのよ・・
」

「第一声は『ムニユ、スイふぁー、セン』だったぞ」

「どうでもいいわよそんなの！」

第一声の話をしたのは鈴だったのに。

「とりあえず座ろうぜ」

「そだな」

「そうね」

一夏の提案で座って話す。

「アンタ、クラス代表だって？」

「ああ、進んでな」

「悪かったって」

その後は他愛無い会話。だったはずだが・・・

「ところでさ、涼介。約束覚えてる？」

「約束って、昔した？」

「う、うん。覚えてる・・・よね？」

鈴が顔を伏せて上目遣いで俺を見る。なんか恥ずかしそうだな。
あゝなるほど、確か・・・

「酢豚を」

「うん、うん！」

期待したような目でこっちを見る鈴。
そうそう、酢豚を・・・あ

「忘れた」

「・・・はい？」

「悪い鈴。俺の脳細胞は働いてない——」

パアンッ！

「え？」

頬をひっぱたかれた。そして叩いた相手は・・・

「最つつつ低！女の子との約束を覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

肩を小刻みに震わせ、怒りに満ちた目には涙がうつすら浮かんでいた。

そして俺から逃げるように走って行った。

幸い周りの喧騒もあって他の生徒には気づかれなかったようだ。

「・・・ハア」

「なあ、涼介」

一夏が話しかけてくる。

「なんだ？」

「お前約束覚えてるだろ」

「・・・・・・・・」

「なんで嘘をついたんだ？」

自慢じゃないが記憶力はいい方だ。約束だって完璧に覚えてる。だが

「ちょっとな」

言えない。これは一夏でも言えない。

しかし、その約束が大事な約束だったかと聞かれれば答えはノーだろう。

「なあ、一夏。約束を忘れたからキレられたのか？」

「・・・気づかないのか？」

「何に？」

「・・・鈍感だな」

「一夏に言われるとは・・・俺も落ちぶれたな」

「どういう意味だ！」

「考えても仕方ない、帰ろうぜ一夏」

「おう」

その後一夏が筭とセシリアに、なぜ自分たちも昼飯に誘わなかったのかと怒られていたのは別の話。

鈴 s i d e

覚えてると思ったのに・・・『料理が上達したら、毎日あたし酢豚を食べてくれる?』って約束。
ドラマとかである『毎日味噌汁を』のアレンジ版だけと同じ意味で・・・
それをアイツは・・・

「忘れたなんて・・・」

あたしはちゃんと覚えてたのに・・・きちんとアイツは・・・

「あれ?」

なんて言ったっけ? 確かイエス的な意味だったと思うけど・・・

まあでも

「クラス代表選で絶対ぼこぼこにしてやる！」

絶対に負けない。

第九話「転校生はセカ・・・ファースト幼馴染」(後書き)

あとがきコーナー

作「お前・・・いったい何を考えてるんだ？」

涼「あえて言うならラーメンを食っとくべきだったかと」

作「・・・まあいいや」

涼「龍賀さん、リンドウさん感想ありがとうございます！」

作「ではまた次回！」

第十話「二回目のバトル!・・・これもやりたくねえ!」(前書き)

タイトルで分かるようにバトルです。

涼「なんで?」

戦闘描写を書いたときたかったから。

涼「相手は?」

セシリア、一夏(のはず)

涼「頑張るか」

無駄に長い文で分かりづらいと思います。すみません。

涼「では本編どうぞ」

第十話「二回目のバトル!・・・これもやりたくねえ!」

涼介 side

鈴とケンカして数日、最近はもっぱら一夏の訓練に便乗してるといった感じだ。

そこで今は・・・

「二対一の・・・」

「模擬戦？」

「そうですわ」

セシリアが提案した案・・・悪くはないが、

「俺もいいのか？」

「もちろんですわ・・・わたくしと一夏さんの二対一もあるんですから」

「なるほど、策士だな」

「？」

ならお言葉に甘えさせてもらって参加しよう。
でその後じゃんけんで順番を決めた結果

「じゃあ、よろしく頼むぜセシリア」

「お任せください。と言ってもすぐ終わらせて差し上げますけど」

「二人ともガンバレ！」

俺対セシリア、次に俺対一夏になった。

「そんじゃハロ」

《デュナメス展開》

セシリアもISを展開し

「さあ踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テ
ィアーズが奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

・・・俺もなんか言うか。

「初陣じゃないが、織斑涼介、ガンダムデュナメス、目標を狙い打つ！」

三人称 side

向かい合う涼介とセシリア。先に動いたのはセシリアだった。

「最初から本気で行かせていただきますわ！」

そういつて、急上昇しながら腰部のピット『ブルー・ティアーズ』を4基射出。それを涼介の周りに飛ばす。

「わお、いきなりですか」

《装備、装備、フルシールド》

「いやいい」

そう言いながら右手を腰背部に伸ばす。
その手に握られたのはGNサーベル。

「訓練の成果を見せないとな」

そして『ブルー・ティアーズ』が攻撃を仕掛けてくる。しかし

「な!？」

「よっと」

《スゴイ、スゴイ》

『ブルー・ティアーズ』からのビームを体を捻って避け、当たりそうなのはGNサーベルで弾く。

「ならこれで！」

そこでセシリアが出したのは2基のミサイル。
確かにこれを斬った場合爆風で自分もダメージを受けるだろう。

《ドウスル》

「なら斬らなければいい！」

空いている左手でふくらはぎのホルスターに収納されている『GN
ビームピストル』をとりだす。

そして、その『GNビームピストル』でミサイルを撃ち落とす。

「ならこれで！」

セシリアがそう言うのと『ブルー・ティアーズ』が涼介から離れる。

「見たところそのISには遠距離用兵装がないご様子！」

そう言い手に有る狙撃銃『スターライトmk?』を構える。

「ゲッ、マジかよ！」

《マジ、マジ》

「だがこつちにも狙撃用の武器はあるぜ！」

《アル、アル》

そう言いながら『GNフルシールド』で隠された右肩から『GNスナイパーライフル』を取り外す。

「どうやら遠距離用兵装はあったようですが、こちらの方が先ですわ！」

「当たらなければどうって事ない！」

セシリアの持つ『スターライトmk?』からビームが放たれる。が

「くっ！ちょこまかと！」

《チョコマカ、チョコマカ》

「お上手、お上手」

それを全弾回避する。

「今度はこっちの番だ！」

「その機動でこの精度!?!」

《オ上手、オ上手》

高速で回避、そして相手を狙い打つ。それが何度も繰り返された結果

「キャア！」

「チッ！」

《被弾、被弾》

お互いのライフルが破壊される。

「さすが代表候補生、異常なくらい強いな！」

「それについてくる涼介さんも異常ですわ！ 『インターセプター』
！」

近接用の剣をだすセシリア。さらに『ブルー・ティアーズ』も呼び出す。

「一夏さんの時のようにはいきませんわよ！」

そう言いセシリアは『ブルー・ティアーズ』を四基飛ばす。

「悪いがいかせてもらう！」

《フルシールド》

対する涼介は『GNフルシールド』を展開、そして飛ぶ。

「避けれるとお思いになって！」

「避ける気はない！」

その言葉通り、涼介はビームを避けず突っ込む。
そして

《分離》^{ページ}

「オラァァ！」

「な！？」

『GNフルシールド』を分離、それをセシリアに投げつける。
それによって一瞬涼介の動きを見失うセシリア。

『ブルー・ティアーズ』で攻撃しようにも、姿が見えなければ狙えない。

その結果

「とった！」

いつの間にか持ち出した『GNサーベル』を上から大きく振りかぶり叩きつける。が

「甘いすわ！」

それを『インターセプター』で受け止めるセシリア。
さらに

「この距離なら！」

残った二基の『ブルー・ティアーズ』からミサイルを2発打ち出す。

「不意打ち上等！」

それに対して涼介もデュナメスの腰部アーマーを開き16発の『GNミサイル』を打ち出す。

セシリアが放った2発のミサイルに数発阻まれるも残りがセシリアに殺到する。

「くっ！『ブルー・ティアーズ』！」

それを『ブルー・ティアーズ』で何とか迎撃する。しかし

「掛かった！」

破壊された『GNミサイル』から出てきたのは圧縮されたGN粒子の煙幕。

それを浴びた結果

「ハイパーセンサーが！？」

ハイパーセンサーは高性能センサー、普通の煙幕では意味がないだろう。

だがしかし、GN粒子の効果は電子機器を無効化する。そのため

「どこから・・・」

目視も、センサーも使えなくなった。結果

「真下がら空きだぜ！」

「しまっ！」

「遅い！」

『GNビームピストル』を両手に持ち連射、結果

「・・・完敗ですわ」

涼介はセシリアに勝った。

涼介 s i d e

何とか勝利したが・・・

「もう動けねえ」

「お疲れさん」

一夏がねぎらいの言葉をくれる。

「俺はいいからセシリアのどこ行ってくれよ」

「ん、そうか」

一夏が離れてすぐにISの通信機能をつなげる。

「セシリア、なかなか楽しかったぜ」

「それは何よりですわ。・・・ハア」

俺に負けて落ち込んでるな。まあ俺はセシリアの機体を知っていて向こうは俺の機体を知らなかったんだから当然か。

「お礼に、一夏との二人っきりの時間をプレゼントだ」

「はい？」

そう言い残して俺はアリーナから出ていく。
さてと、

「まだ弱いな、俺」

《十分、十分》

「いやでも・・・」

なんか嫌な予感がする。

しかし俺は気のせいだろうと首を振って忘れようとした。
それが現実になるとも知らずに。

第十話「二回目のバトル!・・・これもやりたくねえ!」(後書き)

あとがきコーナー

涼「一夏は?」

作「お前とどっちが強いか決めたくなかった」

涼「相討ちって手もあったあろ?」

作「私が上手く書けると思う?」

涼「無理だな」

作「ハッキリ言うな!」

涼「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました!」

作「今回はちょっと短いです」

涼「なぜ?」

作「中体連があるもんで・・・」

涼「どうせ負けるのに?」

作「それでも私は！」

涼「その幻想、俺がぶち殺す！」

作「それ違う！」

良作「「ではまた次回！」」

作「良作になたらしいのに」

涼「ムリムリ」

作「最近ひどくない？」

第十一話「……俺は戦いたくねえ!!」(前書き)

作「題名なに？」

涼「最近戦闘が多い気がするからちょっと」

作「ガンバレ主人公(?)」

涼「……どーぞ短い駄文ですがお読みください」

作「ウグッ！」

第十一話「……俺は戦いたくねえ!!」

試合当日、第二アリーナ、第一試合は俺と・・・

「涼介、覚悟はいい？」

鈴だった。一発目で当たるとは運がいいのか悪いのか。

「駄目って言ったら許してくれる？」

「駄目」

「……じゃあ言うなよ」

俺の視線の先では鈴が自分のIS『シエンロン甲龍』の腕をまるで調子を確認めるかのように

回している。・・・肩に着いた突起が痛そうですね。

対して俺は青の機体『ガンダムエクシア』を展開している。

へそれで両者、規定の位置まで移動してくださいへ

アナウンスに促され俺と鈴は空中で向かい合う。距離は五メートルといったところか。

「涼介、今謝るなら少しぐらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「すみませんでした、もうしません許してください」

「……………プライドってわかる？」

「知ってるぞ、俺にはないものだ」

鈴があきれたような目でこっちを見ている……………そんな目で見るなよ。

もちろんプライドは俺にもあるが、悪いのは約束を忘れたと言った俺だ。だから謝るが……………

「と言っても本気でいいぞ。本気でやらなきゃつまらないしな」

「いいわ、ギャフンと言わせてやるんだから」

「ギャフン」

「……………」

「……………すみませんでした」

どうやらもうシリアスのようだ。無反応がっらいぜ。

へそれでは両者、試合を開始してください

ビーツと鳴り響くブザー。それと同時に一気に鈴に躍りかかる。

「ハアアアアア!!」

右手に持った『GNソード』をソードモードにして振り抜く。

ガギインッ!!

「チッ!」

「いきなりで危なかったわ。でも——」

鈴が手にした異形の青竜刀……にしては異形すぎるものをバトンでも扱うかのように回している。

初撃もそれで防がれた。

そしてそのまま斬りかかってくる。

「――甘いつ!」

ガキンッ!!

それを防ぎつばせり合いをする俺と鈴。
だがその直後鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間。

《危険、GNシールド》

ハロによって『GNシールド』のついた左腕が動く。
そしてくる、まるで殴られたかのような衝撃。

「うおっ!」

何が起こったかわからないがとっさに後退する。
衝撃を防いだシールドは弾かれてしまった。

「運はいいみたいね、でもシールドは無くなったわよ」

また肩アーマーがスライドする。

何が起こったかわからないが危険なのは確かだ。
だが防ごうにも言われた通り『GNシールド』はない。

「ヤッバ・・・」

そしてまた、見えない攻撃が打ち出された。



ピットにはリアルタイムモニターを見ている一夏達がいた。

「なんだよあれ・・・？」

一夏が感想を漏らす。それに答えたのは同じくモニターを見ているセシリアだった。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す——」

ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわと続いた言葉はもう聞いていない。

「アイツは勝てると思うか？」

それを聞いたセシリアは少し間を置いた後、

「分かりませんわ。見た限りでは凰さんもなかなかできるところですし」

「そうか・・・」

「ですが——」

残念そうにする一夏を励ますかのようにセシリアが言う。

「私を一度とはいえ退けましたもの。簡単に負けてもらっては困りますわ」

「じゃあ頑張ってもらわないとな」

少し明るくなる一夏。それを見て微笑むセシリア。そして・・・

「ゴホン、ゴホン、何をやてる一夏。応援しないでいいのか！」

少しイライラしてる筈。涼介がこれを見たら言っただろう、修羅場だ。



「クッ！」

「おわっと！」

「あーもうちょこまかと！」

シールドをなくした俺、どうしたのかと聞かれればこう言うしかない・・・とにかく動き回った。

いくら砲身などが見えないと言っても結局狙わないと当てられない、なら狙いづらくなるよう動こう、ってなった。

どうやってかって？第六感、別名勘だよ。

しかしいつまでもこう逃げ回るってのも駄目だろう。だから・・・

「反撃だ！」

腰背部に手を伸ばし『GNビームダガー』を掴む。
そして・・・

「ハアッ！」

投げつける。

「なっ!？」

鈴もとっさの事で反応できなかったのか動きが遅い。・・・十分早い
いが。

投げた二本のダガーのうち一本を青竜刀で弾き、もう一本を体を逸
らして避ける。

だが体勢が崩れる。そこに向かって突っ込む。

「ハアアアアア！」

「これぐらい！」

鈴も何とか青竜刀でとめようとするが間に合わない。
そして俺の一撃が決まろうとしたとき・・・

ズドオオオオオンッ！！！

「「！！？」」」

俺でも鈴でもない大きな衝撃がアリーナを襲った。

第十一話「……俺は戦いたくねえ!!」(後書き)

あとがきコーナ？

作「ホント運がいいのか悪いのか」

涼「俺は運も運勢も運命も信じない」

作「あ、そこに百円が——」

涼「よっしゃ、今日運がいいな」

作「……何を信じないって？」

涼「自分が言ったこと」

作「……そう」

涼「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました！」

作「過度な期待はご遠慮ください」

涼「その幻想を作者の右手がぶっ殺しますよ」

作「お前が言うセリフじゃないけどね！」

作涼「「ではまた次回!!」」

第十二話「……俺は戦いたくねえ!! 2」(前書き)

遅くなって申し訳ありません。

涼「待ってる人がいるといいな」

……居ないと言わないところがなんか辛い。

涼「本編へどうぞ」

第十二話「……俺は戦いたくねえ!! 2」

涼介 side

さっきまで俺は鈴と戦っていたが・・・

「一体何だ・・・？」

「あたしが知るわけないでしょ・・・」

突然アリーナが揺れ、何かがアリーナの遮断シールドを突っ切ってきた。

何が起ったのかは煙で分からないがここは・・・

「見に行くべきだ!」

「ちょっと! あんた何やってんのよ!? 馬鹿なの!」

「離せ鈴! 俺の野次馬魂が!」

「何よそれ!」

なんて下らないやり取りしていると・・・

《ロック確認、ロック確認、危険、危険》

「鈴！」

「分かってるわよ！」

その場から一気に上に上昇する俺と鈴。
すると侵入者の全貌が観えてきた。

深い灰色をしたそのIS（？）は手が異常に長くつま先よりも下まで伸びている。

あと背中になんか背負ってる感じた。

そして印象的なのが『全身装甲^{フル・スキン}』だ。

通常ISは肌が見えている。なぜなら『絶対防御』があるからダメージは受けないからだ。

「『全身装甲^{フル・スキン}』なんて物好きだな」

「アンタもだけどね」

「……え、マジ？」

「マジ」

……初耳だぞおい。俺も物好きだったのか？

思わず顔を触って確認しているとISの腕がこちらに向けられる。

「あたしたちを攻撃しようとしてる？そのIS、こっちの声聞こえる？」

鈴の声にも無反応。これはあれだな

「返事がない、ただの屍のようだ」

「・・・ふざけてんの？」

「もちr《熱源感知》！？鈴！」

俺はとっさに鈴を抱きかかえ移動する。

次の瞬間さっきまでいたところにビームがとんできた。

「攻撃の意思は大有りらしいな」

「ちょ、ちょっと、降ろしなさいよ！」

「グボッ！」

・・・せっかく助けたのに顔面を殴られた・・・酷くね？

「いいから早く降ろしなさいよ！」

「分かったよっ！」

ビームを回避しながら背中の『GNビームサーベル』をダガー代わりに投げつけ牽制する。

敵は意外と素早いようでダガーを軽々と避ける。

「鈴、どうする？」

「ここは逃げるのが正解なんだろうけど」

「観客が危険か、なら」

〈織斑君！凰さん！今すぐ避難してください！そのISは――〉

「俺（あたし）たちが倒す！！」

〈先生たちがつて・・・ええー！！！〉

先生が叫び声を上げると同時に敵が突っ込んでくる。

それを回転で回避しながら『GNソード』ソードモードと『GNビームサーベル』で斬る。

が当て方が悪かったのか両方とも弾き飛ばされる。

「チッ、つくづく自分の下手さが恨めしい」

「うだうだ言っていないで次行くわよ!」

「あいよ!」

続いて『GNロングブレイド』『GNショートブレイド』手に取る。

「まあ、怪我しない程度に頑張りますか!」



「ヤバくねこれ?」

「喋れるならこれどうにかしなさいよ!」

「無茶言うな!」

途中までは俺と鈴が優勢だったが、問題は敵の背中の装備だった。
止めの一撃を刺そうとした瞬間ありえない方向からの射撃。

何が起こったかと周りを見渡せば、空中に浮かぶまるで牙のような
印象を受けるなにか。

ハロの情報によるとそれは『GNファング』というものらしい。

それが続々でてきて今度は追い詰められたといった感じだ。
なんて言うか・・・

「卑怯じゃね？」

「だから、喋る暇があるなら、如何にかしなさい！」

「如何にかって言われてもなあ・・・」

もうすでに俺は『ガンダムデュナメス』に機体を変えて戦っている。
俺はこのビームの雨を鈴のように避けきる自信がない。
だから『GNフルシールド』を展開して耐えている。

ここでもし勝ちを狙うなら作戦は二つ。

鈴と機体を交換する。これは操縦者が強く操縦機の性能が悪い（俺のに比べれば）鈴と、

操縦者が弱く操縦機の性能がいい俺のお互いの利点を合わせる作戦だが・・・

「無理なんだよな」

「涼介お願い！」

「はいよ」

鈴の背後に居た『GNフアング』を撃ち落とす。
機体の交換なんかできないから無理だな。
となると残るのは一つ、それは・・・

「特攻か？」

だが

「・・・死にたくないから没」

《臆病、臆病》

「なんとも言え」

俺は自殺志願者でもドMでもないし。
となるとやっぱり

「地味にコツコツ落としますか」

「それ以外があるなら教えてほしいわよ！」

「まあ、な！」

両手に『GNビームピストル』を握り乱射。結果4機撃墜。

「もういっちょ！」

『GNミサイル』を全弾発射。8機撃墜。

そうこうしているといつの間にか鈴と背中あわせになっていた。
とりあえず・・・

「鈴、退いてくれないと俺逃げれない！」

「あんたが退けばいいでしょ！」

ん、までよ。まさか・・・

「・・・俺たち追い込まれた？」

「え、うそ!？」

辺りを見回すと『GNフアング』の大群の後ろにいた・・・腕から何か出しますよオーラ全開で。

「完全に積みだな」

「なんであんたはそんな落ち着いてるのよ！」

「ハッハッハ、誰があわててないって？俺超慌ててる！」

四方八方を『GNフアング』に囲まれて一步も動けない。

そしてISからビームが放たれる。

そして極太のビームが射線上にいた『GNフアング』を巻き込みながら迫ってくる。

・・・慌てちゃいるけどやることは決まってる。

「鈴、悪い」

「え、ちょっと!？」

俺は鈴を抱きしめる。そして鈴ごと『GNフルシールド』で体を覆う。

「頼むからもってくれよ！」

そして俺と鈴はビームに飲み込まれた。

一夏side

正体不明のISが乱入して涼介と鈴が戦い始めたとき俺は思わず千冬姉に詰め寄っていた。

「千冬姉何してんだ！早く涼介と鈴を助けに行かないと！」

「落ち着け」

そして出席簿で頭を叩かれる。・・・どっから出した？

「お前が行っても邪魔になるだけだ」

「じゃあただ見てろって言うのか！」

そんな真似俺にはできない、そう言おうとしたら

「そうだ」

「な！？家族が怪我するかもしれないんだぞ！」

「じゃあお前が行ったら解決するのか？織斑と凰は怪我もしないのか？」

「そ、それは・・・」

答えることが出来ずに言いづまっていると

「第一アリーナに入る事が出来ない」

「え、なんでだよ？」

「山田先生頼む」

「はい」

山田先生が操作するディスプレイに表示されたのはアリーナのステータスチェックだった。

「・・・一体どうなってるんだ？」

「・・・お前は馬鹿なのか？」

「そうかもしれない」

余計な見栄を張る必要はない。

「・・・アリーナの遮断レベルが4に設定、それに扉もすべてロックされてる」

「いったい誰が・・・もしかしてあのISが!？」

「そのようだ。このままでは救援も避難もできない」

「じゃあ急いで――」

「行って来い」

「へ?」

行っ
て来い? なんでだ?

「残る障害は遮断シールドだけだ。それならお前のISの単一仕様ワンオフ・アビリティ能力――」

「『零落白夜』で斬れる!」

「ああ、幸い敵は一体。三対一に持ち込めばお前達でも――」

「織斑先生! 所属不明機がビットを展開! 数不明!」

「つくづく最悪なタイミングだ。・・・織斑行くのをやめろ」

「なんでだよ!？」

「これを見ろ」

観ろと言われた画面に映っていたのは涼介と鈴が敵ISのビットからの攻撃を避けどんどん撃ち落としているところだった。

「今は二人で上手く攻撃を合わせているが下手に人数を増やすと逆に動きづらくなる」

「けどこのままじゃ――」

そう言っていると案の定ビットに囲まれ動けなくなる。

そして敵ISからの砲撃が放たれる。

それから鈴を庇うようにする涼介。

「涼介！」

「安心しろ」

そのまま砲撃に飲み込まれ姿が見えなくなる涼介と鈴。

「何たってお前と私の弟だぞ」

けれど涼介の緑色の機体は無事だった。

涼介 side

《損傷多数、損傷多数》

「・・・鈴、無事か？」

「う、うん」

「そりゃよかった」

さてといま俺に分かるのは二つ。

一つ目はデュナメスが使い物にならないこと。俺の予想では腕部脚部ともにもう動かないだろう。

二つ目は・・・

「王手ってか？」

目の前に多数浮遊する『GNフアング』。まるで獲物でも狙っているようだ。

もともと一人用のシールドに二人で入ったんだ。当然隙間ができる。そこに狙いを定めてやがる。

このままだと本格的に特攻するかなと考えていると

――ブラックボックス解析完了

――新機体データ入手

――使用しますか？

「ん？」

ハロが言はないのは珍しいと思いつつもとりあえず答える。

「……勝てる？」

――現在より勝率は上です

「……じゃあ頼む」

――了解、装甲データ変更

――機体名『ヴァーチェ』

そして俺の機体はまた光り始めた。

第十二話「……俺は戦いたくねえ!! 2」(後書き)

あとがきコーナー

作「敵は結局原作の物を少し改良しました」

涼「案を出してくださった皆様誠にありがとうございました」

作「エクシアがあんまり出せなかった」

涼「武器を全部失ってどうやって戦えって言うんだ?」

作「ちなみにキュリオスはもっと少ないかもです」

涼「龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました」

作「ではまた次回!」

第十三話「裁判の力」(前書き)

はいタイトルで分かるとおり、あれ使います。

涼「・・・何故か逆転裁判思い出した」

いや思い出さないで。

涼「それでは本編へどうぞ」

第十三話「裁判の力」

三人称 side

そこに居たのは巨大な白と黒の機体だった。

あくまでも一般的なサイズではあるがごつごつとした外見がそう思わせているのだろう。

しかしその見た目は高い攻撃力を連想させると同時に遅い動きも考えさせる。

現在その機体を敵と定める金属の牙——『GNフアング』はそのことなど考慮しないように動き出す。

空中を自由に動き回るフアング、そしてその先端が機体を・・・貫かなかった。

白黒の機体はその身に似合わぬ俊敏な動きで『GNビームサーベル』を一閃、フアングを切り裂く。

見た目どうりの攻撃力、見た目に似合わぬ俊敏性、それを持った機体

「ガンダムヴァーチェ、織斑涼介、目標を破壊する」

——ヴァーチェが動き出す。

涼介 side

新しい姿になって行き成り『GNファング』が襲いかかってきた。
しかしそこはさすがハロ（おそらく）俺の体を勝手に操作『GNビームサーベル』で一氣に両断する。

その動きの良さを見るに、軽い機体なのだろうと思って軽く腕などを見るとまた違った。

エクシアやデュナメスと比べるとはるかに太い腕。

そこから考えるとやはり重い機体なのだろう。確かに先の二機よりは遅いかな？

だがそんなことは置いといて

「ガンダムヴァーチェ、織斑涼介、目標を破壊する」

何となく言わないといけない気がしたので言ってみる。
さて、姿は変わったが

「現状の根本的な解決じゃなねえ!!」

《ガンバレ、ガンバレ》

「え!?! あんた、なんでISが・・・?」

鈴が驚いてるようだが今は勘弁、先にやるのは

「ハロ、この戦局を開くのに使える装備は!？」

《GNフィールド》

「よしそれ！」

《GNフィールド展開》

ハロン言葉と同時に出現する青白い光、それが俺と鈴を包む。
それと同時にファングがビームを撃ってくるが

「無駄だ！」

そんな軟な攻撃じゃこのフィールドは破れない……と信じた。
すると今度は自身の牙のような形を活かした突進攻撃してくる。

「……これはイける？」

《少し危険、少し危険》

「じゃあこうすれば問題ないでしょ！」

『GNフィールド』を突破しようとしていた『GNファング』を鈴

の青竜刀が切り裂く。

それと同時に他のファングに向けて衝撃砲を放つ。

「確かにな」

俺も見習って手に持っていたゴツイ銃《GNバズーカ》……とやらと

両肩についていた《GNキャノン》……らしい物の照準を合わせ引く。

その結果

「……やり過ぎ」

「俺のせいじゃないぞ」

《ハロ違ウ、ハロ違ウ》

ファング数基とともに地面が抉れた。削れたではない。

しかし俺も男、やっぱりこういう武器を見たら思うんですよ。

「全力で撃ったらどうなるんだ？」

《ヤッテミヨ、ヤッテミヨ》

「あんた等何する気よ!？」

この気持ちは女子供には分からないだろう。
だがしかし、やってみたいものはやってみたい！
幸いにも敵はいる。言い訳には現状の打開といえいい。
ということだ

「ハロ、準備よろしく」

《了解》

「結局やる気？」

そう言いつつもファングが来ないようけん制射撃をしてくれる鈴は
いいやつだと改めて思う。

ハロに頼んだ後両腕が勝手に動き『GNバズーカ』を胸の位置にあ
る太陽炉に接続させる。

すると『GNバズーカ』の先端が上下にスライドする。

《バーストモード移行完了》

「要するに？」

《撃テ、撃テ》

「あいよ！」

言われた通りに引き金を引き撃つ。目標は敵本体。
そして放たれたビームは

ズガガアアアアアアアアアアアズガン!!!!!!!!!!

「・・・マジすか？」

《マジ、マジ》

射線上に居たファンクを総べて巻き込みながら敵本体に直撃。
そこで終わればまだ驚かなかった。

そこからさらに敵本体を壁際まで押し込み、壁に直撃させた。

それによって『GNファンク』が多数出てきたバックパックはおそろく破壊できた。

つまり

「勝てる？」

が良い事ばかりでもなかった。

《粒子残量低下、GNフィールド維持不可能》

「・・・えっと？」

《GNフィールド消失》

「マジかよ!？」

《逃ゲロ、逃ゲロ》

「言われなくても！」

確かに大多数のファングは倒せたが、まだ数基残ってる。
そこにさっき敵本体が撃ってきたビームまで混じると結構辛い。
ならやっぱり

「ここで倒す！」

「な!?! 涼介！」

敵本体との距離は近くもなく遠くもない、そんなところだ。
エクシアなら何とかなるかもしれないがヴァーチェはやはり遅い。
そして本体の危機と思ったのかファングが攻撃を仕掛けてくる。

「チッ! ハロ！」

《足りナイ、足りナイ》

「やっぱりか！」

今なら『GNフィールド』を張れないか期待したが粒子が足りないらしい。

そうなるとう当然止まって迎撃か、無視して突破かになるが

「涼介！早くいきなさい！」

今まさに俺に突っ込んで来ようとしていたファングが鈴の衝撃砲によって撃ち落とされる。

さっき考えた選択肢、それは一人の場合だ。

今現在、鈴によっていたファングはすべて俺を追いかけてきている。つまり鈴は自分への攻撃を心配する必要がない。

・・・羨ましい限りだぜ。

だが

ガンッ！ガンッ！

「いってえ！」

《GNバズーカ破損、並びに左腕部損傷、損傷レベル中》

いくら鈴でも動き回る小さな物をすべて撃ち落とせるわけがない。当然一基二機と突破してくる。

それによって

右腕がやられる。しかし進む。

「これしきのことぞ！」

左手がやられる。しかし進む。

「それでも！」

両足がやられる。それによって倒れてしまう。

「だとしても！」

口ではこんなことを言っても体は動かない。

そして俺は多数のファングの攻撃を受けつづけ爆炎に包まれた。

鈴 s i d e

涼介が勝手に突っ込んでいった後、

あたしの周りに居たビットみたいなのは全部涼介を追いかけて行った。

言外に相手にする価値がないと言われているようでムカついたのは秘密だ。

その為あたしは涼介に群がるビットみたいなのを衝撃砲で撃ち落としていたけど。

「くっ、キリがない・・・」

落としても落としてもまた出てくる。その結果撃ち漏らしが出てきて

「涼介！」

涼介が撃たれる。

必死にそうならないように衝撃砲を撃つけどどうしても間に合わない。

そしてビットが涼介を取り囲み攻撃、爆発が起こった。

普通はI Sの『絶対防御』が発動するけど敵が普通じゃない。

もしかしたら死んでるかもしれない。

久しぶりに会ってまだ間もない

「涼介、ねえ聞こえてるんでしょ・・・」

やっと会えたのにちゃんとした会話もしてない

「聞こえないふりなんかしないでよ・・・」

必死に頑張って会いに来たのにまだ思いを伝えてない

「ねえ！涼介！返事しなさいよ！」

大声で叫ぶ。それでファングなどがこっちを見るけど知ったことじゃない。

涼介が死んだかもしれない、それしか考えられなかった。

そしてファングが残った敵を倒そうと涼介が居た場所からあたしを狙い始める。

けどあたしの目には涙で少しぼやけた、さっきまで涼介が居た場所しか見えない。

「涼介ってば！！」

次の瞬間ファングが

ゴトン、ゴトン

落ちた。

「え？」

撃墜された落ち方じゃなくて、ただ重力に身を任せたような落ち方。
まるで電源を落とされたような落ち方。
そして爆炎の向こうから赤い光を身にまとい

「りょう、すけ？」

「人を勝手に殺すなよ」

赤い髪のようなものを付けた涼介が出てきた。

涼介 side

うん、鈴があんな風になるとは思わなかった。

《泣カセタ、泣カセタ》

「謝りに行くのは決定だな。けど——」

ただ直立しているだけの俺。

当然恰好の的でファングが群がる。

それに対して俺がとる行動は簡単、来るファングに向けて手をかざす。

それだけで

「今は俺が、こいつらをぶっ壊す」

ゴトン、ゴトン

次々とファングが落ちていく。

俺がしたのは簡単、ただファングをシステムダウンさせただけ。

そして俺の見ているディスプレイにはこう出ている。

トライアル
—————
裁判システム

頭に流れ込んできたナドレのデータ中であつた能力。

それが単一能力なのか分からない。

ただ言えるのは

「テムエは万死に値する！」

まだ残ってたファングが攻撃しようとしてくる。

この能力は自分の周辺の機械を意のままに操る。

それを使い先ほど落したファングを操作、体当たりさせる。

それ以外にもファングが遠距離から攻撃してくる。

この能力の欠点の一つ、遠すぎると効果がないとこだ。
だが

「言っただろう、俺がつて」

足元にあったナドレの外装、その中から『GNキャノン』をとり撃つ。

そして一気に加速、本命の所まで行く。

だが易々とやられてくれるハズもなく右手を振り、殴りつけて来ようとする。

「いいぜ、力比べだ。だが——」

ハッキリ言ってナドレは貧弱だ。ヴァーチェと違ってあまり力はない。

だから迷わず俺は左の

「誰も拳とは言ってねえ」

『GNキャノン』の引き金を引く。
溶解する敵の右手
卑怯じゃない作戦だ。

「さてとじゃあ止めだ」

《敵五基接近、敵五基接近》

「ん」

ハロによると後ろからファングが来ているらしい。
けど

ダン、ダン、ダン、ダン

シャツ！

バン、バン、バン、バン、バン

四つの銃撃音と一つの斬撃音、そこからの五つの爆音。

一つ言っておくと、一夏はとってもお優しい奴で、仲間が危機に陥ったら絶対助けに来るような奴だ。

そして一夏が大人しく言うことを聞くのは千冬さんくらい。

さらに千冬さんなら今が敵を倒すチャンスだってことぐらい簡単にわかる。

ここから結論づけると

「よう一夏」

「よく来るのに気付いたな」

「真実はいつも一つ」

一夏とセシリアが援護に来る。

そう思ったからこそこの行動。
さて

「長く続いたこの面倒な戦いも一件落着」

敵が残った左手を向けてくる。

ドスン

それを『GNビームサーベル』で斬り落とす。

「後はテメエが何なのか調べるだけだ」

そのまま敵のISコアをくり抜くように切り出す。
が簡単にいく筈もなく、敵が光り出す。

「これは・・・まさか自爆？」

「だがそんな権利、テメエにねえ」

それをトライアルシステムで強制停止。
そのままISコアを抉り出し

「あるのは俺に壊される権利だ」

『GNビームサーベル』を一閃、真っ二つに。
だがしかし、考えてみよう。

爆弾を真っ二つに切り裂くようになるか。
答えは

「なあ・・・不味くね？」

「・・・ありゃ」

《シマラナイ、シマラナイ》

爆発、そこで俺の意識は途絶えた。

第十三話「裁判の力」(後書き)

あとがきコーナー

涼「・・・駄文？」

作「・・・たぶん」

涼「え、たぶん？」

作「すいません、絶対です」

涼「なあこの展開、普通に読まれてたぞ」

作「でもねえ・・・」

涼「GNバズーカの威力は書いてないし」

作「スママセン」

涼「しかもトライアルシステムでファング乗っ取てるし」

作「まあユニコーンみたいなもんです」

作「もうすぐ一巻終了」

涼「次は二巻か」

作「その前に何か番外編を入れてみたい」

涼「番外編（笑）？」

作「否定はしない」

涼「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました」

作「ではまた次回！」

第十四話「事件のその後」(前書き)

短いですがどうぞ

第十四話「事件のその後」

涼介 side

心地いい背中感触、おそらく布団に寝かされてるんだろう。
理由は・・・うわ、思い出したくねえ。てか後で一夏に謝らなきゃ。
何の気なしに目を開けると

「あ・・・」

「・・・おはよう？」

「ヒヤア!？」

ドアップの鈴の顔があった。
悲鳴あげるなんて・・・ちよっと傷つくぞ。

「涼介!？ あ、あんたいつ起きたのよ!？」

「ついさっき。てか鈴は何してた訳？」

「そ、それは・・・」

「なるほど、俺の可愛らしい寝顔を見てたわけですな」

「……自分で言ってるんじゃないわ〜と思う。ついでにさっきよりも傷ついた。」

「そ、そんなわけじゃない！誰があんたなんかの顔を！」

「くっ、自分で思った言葉を幼馴染に言われるとここまで威力が上がるのか……」

「い、嫌ってわけじゃないけど……」

「ん、なんか言った？」

「……なんでもないわよ」

俺のベッドの横の椅子に座る鈴。俺へのお見舞いは……な、誰も何も持ってきてくれなかったのか？
……そうだ

「鈴、あのな」

「なに？」

「小学校の時の約束、覚えてるぞ」

「え、あの時忘れたって・・・」

「『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だろ」

「う、うん／＼／」

赤くなってる鈴。ん？恥ずかしいのは俺なのに

「それに対して俺の返答が――」

言いたくねー。でもこれ言わないとな。

「『いいぜ、美味しかったら俺のお嫁さんにしてやるよ』だったのか？」

「え、あ・・・確かにそんな事」

「いやゝ恥ずかしいな鈴」

「もしかして涼介、あんた・・・」

ああ、気づいてた。鈴が遠くに行ってから気付いた。

「あの約束って――」

「そうあたしは——」

「タダ飯奢ってくれる約束だったのな」

「あんたの事がすきって、え？」

まったく、ノリが『毎朝私の味噌汁を』だったから騙されたぜ。
いくら小学生の時の約束でも恥ずかしいものは恥ずかしいし。
……ああ、なんで言ったんだろう。

「なんだ……気づいたと思ったのに……」

「うん？何をそんな落ち込んでものか知らないけどさ」

鈴がORZみたいな感じになってる。
まさか

「……俺の事が好き、みたいなの？」

「そ、そんなわけないでしょ！」

……く、満に1つの可能性にかけて言ってみたが違うようだ。
そしてなぜ鈴が「なんであたしって素直じゃないの……」とか
言いながら落ち込んでやる。

「なあ鈴」

「なによ」

「酔豚、楽しみにしてるからな」

「・・・ええ、期待してなさい！」

また元気になってきたな。

「そうだ、一夏って無事？」

「あんた以外の負傷者はいないわ」

「そりゃよかった」

「あんた・・・自分の体ぐらい大切にしなさいよ」

「ん？」

鈴が心配するとは、人は変わるもんだ。口に出した瞬間俺の傷が増えるだろうけど。

「あそこで下手に手を出さなくても一夏達が来てくれたでしょ」

「うん、まあそりゃそうだけどさ・・・」

「なに？あんた漫画の主人公みたいに倒せると思ったの？」

「いやなに、当初の目的通りだよ」

「？」

「だってあそこで引いたら逃げ遅れた人が狙われて怪我するかもしれないだろ」

「だからあんたが囧になったってわけ？」

「そゆこと。ま、やられる気はサラサラ無いけどな」

なんかまた眠くなってきた。

「じゃあ・・・俺・・・もう一眠りするから」

「うん」

そして俺は意識を手放した。

三人称 side

ここはIS学園の地下五十メートル。学園の中の隠された場所の一つ。

そこで麻耶と千冬がISであった物を見ていた。

「このISの解析結果が出ました」

「そうか、やはり？」

「はい、無人機です」

基本ISは中の人間を危険にさらさないよう多数の機能がある。
なのに真っ二つにされ、はては爆発などといった事が出来るだろうか。

答えは中に人が乗っていないなければならない。

しかし、それは問題でもある。

なぜならISは独立稼働も遠隔操作もできない、いや出来ていない。
そのことの重要性は学園の知ってしまった人に箱口令が敷かれるほどだ。

「それでコアは？」

「……登録されていないコアでした。きれいにくり抜いてあつ

「だからこれは確實です」

「そうか」

やはりな、そう続ける千冬。

「それとついでに頼んだことだが・・・」

「織斑くん、だと分かりづらいですから涼介くんのISですね」

無言で頷き先を促す。

「残念ながら何もわかりませんでした。データを取ろうにも殆どの計器類が使用できませんでした」

「それは・・・光の粒子のせいかな？」

「おそらくそうです」

謎が深まるばかり。だが千冬の顔に落胆は無い。

「何か心当りがあるんですか？」

「前者二つは今は、無い。後者は――」

その顔にはまるで戦士のような鋭さが浮かんでいる。

「本人に聞けばいい」

「素直に教えてくれますかねえ？」

「問題ない。あれは私の弟だからな」

その顔に笑みを浮かべながら言う。

「弱みなら握っている」

「何する気ですか!？」

「ん?じゃあ体に聞くか」

「それも駄目です!」

その同時刻にある場所で寝ていた少年が悪寒を感じたことは言うまでもないだろう。

第十四話「事件のその後」(後書き)

あとがきコーナー

作「なんか恥ずかしい事言った人がここに居る」

涼「やめて！私のライフはもうゼロよ！」

作「悪寒感じた？」

涼「ああ、まるで死神がいたようだった」

作「龍賀さん、天照大神さん、感想ありがとうございました」

涼「駄文ですいません」

作涼「「ではまた次回！」」

番外編「懐かしの夢」(前書き)

何となく書いてみたシリーズです。

あまり期待せずお読みください。

ではどうぞ。

番外編「懐かしの夢」

??? side

突然だが皆さんに質問だ。

あなたは親に捨てられたことがあるか？

まあそんな経験あまりないと思う。

しかし俺はそれを経験した。

じゃあ次の質問だ

捨てられた後にすぐ拾われたことがあるか？

これも現在俺が経験している。

自分と同じくらいの子供に連れられて来た。

それでは次の質問だ

その家も親がなかったか？

俺が連れて行かれた家には俺と同じくらいの子供。そして鋭い目つきの子供の姉。

その二人しかいなかった。

そして最後の質問だ

いつの間にか家族にされたか？

俺はされた。名前を貰い。食べ物を貰い。寝るところを貰い。

それがいつ決まったのかは思い出せない。だが何一つ俺は言って無いのは確かだ。

ただ行き成りだったかといって別に怒ったりしなかった。

何せ生きていけるか分からないときに拾われたのだ。感謝しなくてどうする。

まあそして俺はその家に厄介になることになった。

後で聞いた話によると俺の名などは姉の友人が上手くやって手に入れたらしい。

しかし問題はその家の事情だ。

聞いた話によるとその家は親が居ないらしい。これは話したな。親が居ないということは財源がないということだ。

そんなところで厄介になるなど俺の良心が許さない。

そう思い、俺は少しでも家計の手伝いになることをしようと決めた。まず思いついたのが食費だった。

その家で生活しているときその二人は平日はいつも学校だ。

俺は・・・行きたくないと言って行かなかった。

ハッキリ言って学力には自信があるので学校には行かなくてもよかった。

なので休みなどではなく入学していなかった。

そしてその二人は優しくいつも昼飯が用意してあった。

そこで目につけたのがその昼飯だ。

それを冷凍、後日にとっておくということを始めた。

ただそれだと腹が減る。それでも俺は育ち盛りだ。昼抜きはつらい。
その為俺は

「♪〜」

カシャ カシャ カシャ チャリン

「お、見つけた・・・百円か、ラッキーだな」

色々なところで落ちている小銭を集めることを始めた。

そしてたまった分で昼を補う。

我ながらいい考えだと思った。

そして夕飯に昼飯を食べる。これで少しでも金が浮くと思った。

そんな事を続けていたある日のこと。

「ん？新しい飯屋か。いってみるか」

言葉どうり新しい店を見つけたので入ってみることにした。

そこは価格が安くて量が多いという俺にとって最適な店だった。

その上俺が平日に学校に行っても何にも聞いてこなかった。
その為毎日といってもいいくらい来ていたのだが

「・・・・・・・・・・」(ジー)

「・・・・・・・・・・」(モグモグ)

「・・・・・・・・・・」(ジー)

「・・・・・・・・・・」(モグモグ)

「・・・・・・・・・・」(ジー)

「・・・・何？」

「え、あ、あんたを見てたわけじゃないわよ!!」

「・・・・俺は見てたなんて一言も言って無いんだが」

よく知らない少女が現れるようになった。

知っていることといえばこの店の人の娘という事。

聞いた話によると日本人じゃないらしい。まあ俺も何人か分かんないけど。

そして知らない間に友達にさせられていた。いや別に俺友達いないからいいけど。

そしてそれから数か月経ち・・・

「あんたなんで学校いかないの？別に人見知りって年でもないでしょうに」

「そうだぞ。千冬姉が困ってたぞ」

俺の義兄とともに学校に行くように言ってきやがった。
いやお前らいつ仲良くなった？

「そんなのどうでもいいだろ」

「そうよ」

・・・いや人の心読むなよ。

「千冬姉がさ『あいつは遠慮ばかりして私たちの事を家族とって
いないのか?』って言ってたぞ」

・・・それは盲点だった。まさかそう言う考え方もできたとは。
俺としては遠慮するべきかと思ったんだが・・・

「遠慮しなくていいのか?」

「いいだろ別に。家族なんだから」

・・・そうなのか。

「あともう一つ、『お前は余計な心配をしなくていい。ただ自分の
望みを叶えろ』だってさ」

「・・・望みね」

・・・とりあえず

「そんなカッコイイこと言える千冬さんを目指そうかな」



「・・・ん？」

ここは・・・俺の部屋のベッドか。
今のは夢？でも夢に質問されるか普通？

「涼介、居る？」

「なんだ鈴？」

噂をすればなんとやらだな。噂してないけど。
ドアを開けると案の定幼馴染がいた

「なんだ？夕飯の誘いか？」

「よく分かったじゃない。さっさと行きましょ」

・・・夢で小さい鈴を見たからかもしれないけど

「なんか鈴が可愛く見えるな」

「な！？／／／」

「気のせいだろうけど」

「それってどう意味よ！」

まあ色々あるけど平和だなく。
こんな平和が長続きするといいな。
そう思う俺であった。

「どういう意味か言いなさい！さもないと衝撃砲撃つわよ！」

「平和が終わった！？」

番外編「懐かしの夢」 （後書き）

あとがきコーナー

涼「懐かしいな」

作「・・・懐かしいですむか!？」

涼「なんで？」

作「どんだけハードな生活だよ」

涼「確かに辛かったが・・・楽しかったぞ」

作「・・・まあいいや」

涼「てかこれなんだよ。鈴と出会った当初の事がちょこっとしか出てねえじゃねえか」

作「・・・オリジナルって難しい」

作「天照大神さん、龍賀さん、感想ありがとうございました！」

涼「ではまた次回！」

作「感想など、まってまゝす！」

第十五話「三対一ってなんて無理ゲー？」（前書き）

勝手にたトライアルシステムに制約付けました。

今回は・・・タイトル通りです。

どぞ

第十五話「三対一ってなんて無理ゲー？」

涼介 side

まったく・・・

「なんでこんな事になるんだよ！」

「まあ頑張れってな」

俺が今いる場所はアリーナ。

周りに居るのは一夏、セシリア、鈴のいわゆる専用機組だ。

なんでもファングを落としたトライアルシステムの力を計測したいらしい。

まあこれで俺も強くなれる。そう思ってた時期もありました。

「けど、3対1なんて・・・」

「主人公みたいでいいじゃん」

「俺じゃせいぜい主人公（笑）だよ！」

まあやるけど。

今の装備はトリアルシステム、並びにナドレの力を見る為にナドレになっている。

この機体は軽量化を図っており最低限の武器しかない。けど

「八つ当たりしてやる！」

「おう来い！」

「行くわよ！」

「行きますわよ！」

その代り最強の能力がある。

「トリアルシステム！」

それによって動きが止まる・・・一夏だけ。
鈴とセシリアは止まらない。

「なんでだよ!?!」

《一体ダケ、一体ダケ》

「だからなんでだよ!?!」

《ガンバレ、ガンバレ》

「どうやってだよ!?!」

鈴の青竜刀を左手に持った『GNビームサーベル』で止める。
続いて放たれたセシリアのビームを『GNシールド』で止める。
付け込めそうなのは・・・

「セシリア! あんたもうちょっとであたしに当たるところだったじゃない!」

「鈴さんがそこに居るから悪いんですわ!」

「・・・なんだかイケそうな気がする」

幸い一夏はまだ動けない。
なら

「一気に決める!」

先に狙うのは・・・鈴。

「とにかく下手に撃たないで！」

そうセシリアに言いながら青竜刀を構える鈴。
接近そして・・・

「トライアルシステム！」

「な！？しまった！」

トライアルシステムは何も一回しか使えないわけじゃない。

「悪いな鈴」

一気にサーベルで切り裂く。
さらに追撃を仕掛けようとしたところで

「やらせるか！」

一夏が『イグニッション・ブースト瞬時加速』で突っ込んでくる。
それをいなしながら後退するが

「後ろがお留守ですわよ！」

背後にセシリアのビットが四基、待ち構えていた。
けど

「残念、まだだ！」

《トライアルシステム》

そのビットを乗っ取る。

そしてまた接近戦を仕掛けようとする一夏と鈴に向かって

「フルバーストってか？」

ビームを撃ち込む。

それによって起こる煙、そこから出てきたのは

「ハアッ！」

一夏だった。『雪片式型』で斬りかかってこようとしたのだろう。
だが

「残念」

「な!？」

猪突猛進、そう表すのが正しいであろう一夏の行動を読めない筈がない。

くる方向に向けて構えておいた『GNビームライフル』の引き金を引く。

そして着弾を示す煙、それを確認すると同時に背後に攻撃を喰らったことを確認する。

「グワッ!」

「背中が空いてるわよ!」

鈴の存在を忘れていた。

一気に背後を向き反撃しようとしたが、周りに銃撃がくる。

「セシリアか!」

「忘れてもらっては困りますわ!」

反転を諦めそのまま前に向かって逃走。
しかしその先には

「懲りねえな！」

ビットがまた待ち受けている。
それをまた乗っ取ろうとしたとき

「それはブラフですわ！」

「甘いわよ！」

後ろからの攻撃、セシリアのライフルと鈴の衝撃砲。
セシリアのビットが巻き込まれるのもお構い無しだ。
さらに一夏が接近『雪片式型』を向けてくる。
それに対して俺は

「・・・何で剣に銃向けてるんだ？」

『GNビームライフル』を向けた。
この武器、ちょっと特殊で

「剣だから」

ビームサーベルが出せる。

「なにっ!？」

「油断大敵ってな！」

そのまま一夏の『雪片式型』を弾く。

そこで狙うのは一夏ではなく

「あたし!？」

後ろに居た鈴。なぜなら一夏よりもダメージを喰らってるからだ。

『GNビームサーベル』と『GNビームライフル』のビームサーベルで斬りかかる。

すると案の定鈴のシールドエネルギーがゼロになる。

俺はそれに目もくれず一気にセシリアの所まで飛ぶ。

「くっ! まて涼介！」

「お前が止まってる！」

《トライアルシステム》

再びトライアルシステムで動きを止められる一夏。それを無視してセシリアの所にたどり着く。

「またこの展開ですか！」

「だがこの前よりも状況はきついで！」

セシリアの残っているビット二基を乗っ取る。

セシリアが『インターセプター』を出そうとするが遅い。
そして二つの銃撃と多くの斬撃が当たった結果

「うう、また負けましたわ」

「またの挑戦待ってるぜ」

セシリアを撃破。そして残る一夏だが・・・

「トリアルシステム」

で動きを止め。

「ハロ、『GNキャノン』の用意」

《了解》

「ちょっと待て！何でおれだけそんな！？」

「言っただろ・・・八つ当たりだ」

まあこの後はご想像にお任せする。

これが人によっては非日常的な俺の日常のうちの一日だ。

第十五話「三対」ってなんて無理ゲー?」(後書き)

あとがきコーナー

涼「俺の勝利!!」

作「まあほぼチートだし」

涼「トライアルの大盤振る舞いだぜ!!」

作「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございます」

涼「本編すすめろよ」

作「……それではまた次回!」

涼「無視か!?!」

第十六話「二人の転人生」(前書き)

涼介&グラハム

グ「抱き締めたいな、ガンダム！」

涼「勘弁してください!!！」

グ「身持ちが堅いな、ガンダム！」

涼「そうですか!!！」

グ「だがそんな道理、私の無理でこじ開ける！」

涼「開けないで!!！」

・・・なんだかな・・・

時々やるかもしれませんが。ただやめてほしいと言われたらすぐやめます。

第十六話「二人の転入生」

涼介 side

今日も特に何もなく平和に・・・

「今日は転校生が来ます！」

「「ええええええっ!!??」」

「クソッ! 平和は無いのか!?!」

「涼介・・・諦めろ」

くそ、一夏の野郎まるで人生を諦めた人みたいに・・・というか

「貴様は平和なうえに幸せだろ!?!」

「どこがだよ!？」

「ええい! モテモテのくせしやがって・・・ええい、この顔か!？
この顔がモテスリムか!？ スリム分はやるからモテ分をよこせ!」

「なんだよそれ!？」

まあなんて口論をしてると

「織斑・・・煩いぞ」

「「すいませんでした!」」

こうなる。まあ最近読めてきた展開だ。
ここで一つ特殊な話をしよう。

実は俺と一夏の間席がチェンジしてる。

まあ理由は・・・叩きやすいようにだそうだ。

意味が分からない? 詳しく言うと居眠りしてる俺を叩き起こすなら
近い所に置いたほうが楽だそうだ

・・・職権乱用じゃね？
だがしかし
その程度で俺は

「眠るのを止めるわけにはいかない」

「涼介、お前って・・・くだらない所で勇氣あるな」

「照れるぜ」

「褒めてるわけじゃないけどな」

まあどうでもいいや。
俺は寝るために机の上にスペースを作ってそこに肘を置き手に顎を
のっせる。よくある体勢だ。
そして目を閉じる。よく眠れそうだ。

「しかもですね、転校生は二人います！」

「「キャアアアアア！！！」」

「普通、分散させるんじゃないのか？」

一夏、至極まっとうだがこの学園に常識は通用しない。
そしたら扉の開く音が聞こえた。
まあ見る気はないけど。どうせ女子だ。

「失礼します」

「……」

二人分の足音が聞こえた後なぜかざわめきが止まった。

「シャルル・デュアノです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、

みなさんよろしく願います」

なるほどシャルルさんか。後で挨拶するか。

「お、男……?」

誰かが呟いた。

ん? じゃあシャルルさんじゃなくてシャルル君なのか。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

まあ俺と一夏がいるし今更一人や二人増えたって問題は……

「きゃあああああああ————っ!!」

あるのか。なるほど女子の声はスゴイな。ソニックウェーブで顔がとんでいくかと思った。

……なんとなく興味がわいたので片目だけあけてみる。

顔は中性的で整っている。髪は濃い金髪。それを首の後ろで束ねている。それで体はとても華奢。

最初に思い浮かぶのはカッコイイよりカワイイだと思う。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー!」

千冬さんと山田先生が止める。
ついでだからもう一人も見てもよう。

輝くような銀髪。ともすれば白いそれを、腰近くまで長くおろして
る。

きれいだが、手間をかけてる様子はない。ただ伸ばしているだけと
いった感じ。

そして特徴的なのが左目の眼帯。白いのじゃなくて黒いやつ。
逆の右目は赤色をしている。

印象は『軍人』。

んそろそろ眠たくなってきたので寝る。
お休み。

一夏side

銀髪の転校生はつまらなそうに、見下すように教室の女子を見回す。しかしすぐにそれを止め、今は視線を千冬姉だけに向けている。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

行き成り佇まいを直して、素直に返事をする転校生————ラウラにクラス一同がポカンとした視線を向ける。
教官と呼ばれた千冬姉はというと

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。」

私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

面倒くさそうな顔をしながら言う。

それに対してのラウラの答えは敬礼しながらのそれだった。

つまりラウラはドイツの軍事関係者だろう。

——とある事情で千冬姉は一年ほどドイツで軍事教官として働いたことがある。

その後一年ほどの空白を置いて現在のIS学園教員になったらしい。色んな人から聞いたから確かだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……」

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

……山田先生ドンマイ。

そう考えているとラウラはいきなり睡眠中の涼介の方に近寄って

「！貴様が——」

手を振りかぶりつてえ？

「涼介！」

そして・・・

涼介side

・・・

トストストストス

・・・

スウ　ブン

カクッ

スカッ

ドン ザク

「いってえええええ!？」

何何故どうして何がどうなってこうなった!？

「な!？」

銀髪の転校生! 驚きたいのはこっちだ! いきなり顔を強打したと思
ったら何か刺さって・・・

パアンッ!

「貴様はまだ寝ていたのか」

後頭部を叩かれて。
もう永久の眠りにつきそうです。

一夏side

・・・なんて言うか、まるで漫画だった。
どうなってたか説明すると。

トストストストス (ラウラが歩いた音)

・・・ (涼介爆睡中)

スウ ブン (ラウラ手を振りかぶり、振るう)

カクッ (涼介の頭が手から落ちる)

スカッ

(ラウラ外す)

ドン ザク

(涼介の頭机に落ちる、シャーペンが突き刺

さる)

パアンッ!

(千冬姉出席簿で打つ)

涼介無事か?

涼介 side

何が起こったか分からないが

「……行き成りなにしゃがる!?!」

「まずシャーペンを抜いたほうがいいと思うぞ」

「……ちょっと失礼」

よいしょっと、・・・痛い。

「で、えーと、とりあえず誰だ!？」

「今更か!？」

最近一夏のツツコミポジションが決まってきたな。
すると銀髪転校生が手を振りかぶり・・・

バシンッ!!

俺の頬をぶった。

「2度もぶった!親父にもぶたれたことないのに!」

・・・ちょっと待てよ

「俺、親父いないんだった……何で言ったんだろ……」

「自分で傷つくぐらいなら言うなよ！」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

無視だど！？それがどんなにつらいか知ってるのか！？
てか、あの人って……千冬さんか？

「なんであんな怖い人が姉なのか俺も知りた——」

ギロリ！

「……なんでもないです」

「お前って馬鹿だろ」

「事実だ……すみません！あ、ちょっと角は！」



「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。」

今日は二組と合同でIS模擬戦を行う。解散！」

……死ぬ。出席簿の角ってここまで痛かったっけ？

パンパンと手を叩いて千冬さんが行動を促す。

さて、さっさと行動しないと女子の着替えを見なきゃならない。

少し見たい気もするがたった一回の幸福のために人生棒に振りたい。ない。

「おい、織斑。デュアノの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「君が織斑君？初めまして。僕は——」

「違うぞシャルル。俺たちは二人で一人の織斑だから両方おりm——」

「織斑涼介・・・」

「行こうかデュアノくん！急がないと（俺が）死んじゃう！」

「う、うん」

駄目だ！次ふざけたら俺死ぬ！てか殺される！

そんなこんなで俺、一夏、シャルルは空いているはずの第二アリーナ更衣室に走る。

そんで走りながら自己紹介した結果お互い名前で呼ぶことになった。そんな感じで

「とうちゃーく！」

「急がないと千冬姉に怒られる！」

「わあっ!?!」

一夏が服を脱いだとたんシャルルが驚いた。
・・・まさか女子が中に!?

「どうしたシャルル？」

「え、あ、うん、なんでもない！」

「何で着替えてないんだ？早く着替えないと涼介の二の舞に――
――」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて・・・
ね？」

「いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが・・・って、
シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない！別に見てないよ!？」

シャルルはどうしたんだろうか？一夏の上半身裸を見たくらいで狼狽えて。

俺の方みても狼狽えてるし。何だろう？

まあ俺も人の着替えをジロジロ見る気はないのでシャルルから目を逸らすが……

「シャルル、見るなよ」

「え！？ 見てないよ！」

……冗談で言ったら当たった。まあ見られても別に減るものは無いしいけど。

そんなこんなで着替え終了。シャルルはよく分かんねえけど早かった。

けどまあ

「遅い！」

俺と一夏が遅かったんだけど。
シャルルすまん。

そして列の端に三人でならぶ。
すると一夏の隣にいたセシリアが話しかけてくる。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

全力で走ってききましたか？

するとたまたま俺の後ろに居た鈴が俺に話しかけてくる。

「アンタ、朝からなんかしたってホント？」

「・・・・・・・・」

「涼介さんは今日来た転入生の方にはたかれましたよ」

「はあ！？涼介アンタ何でそんなバカなの！？」

「・・・・・・・・」

「一夏さんはなんで遅かったか、ちゃんと話したらどうなの？」

「・・・・・・・・」

俺も一夏も無言だ。だって……

「貴様ら、いい度胸だな……」

……死にたくないもの。
本日の犠牲者追加です。



その後二人は罰？かは知らないがISで戦闘をさせられた。
相手はなんと山田先生。

それで勝者は当然代表候補生組と思ってたら

「山田先生なんでこんなに強いんだ？」

「俺に聞くなよ」

山田先生の大勝利。元代表候補生だったそうだ。

・・・しかしその胸は俺や一夏には毒というか猛毒・・・

ギロリ

・・・鈴に睨まれた・・・なぜ？そうか、お前胸が・・・うお！
？理由考えたら衝撃砲むけられた！

「さて、これで諸君にもI S学園教員の实力は理解できただろう。
以後は敬意をもって接するように」

千冬さんが手を叩きながら言っている。うん、これから敬意もって
いこう。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュアノ、ホーデヴィツヒ、織
斑、凰だな。

・・・では織斑涼介以外で8グループになって実習を行う。
各グループリーダーは専用機持ちがやること。

織斑涼介はまだここに慣れていないデュアノとホーデヴィツヒにつけ。

いいな？では別れろ」

その後一夏とシャルル（十俺）の所に大量に女子が寄ってきたのは言う窓までもない事だろう。

その後

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。

次もたついた場合はISを背負ってグラウンド百週させるからな！」

と呆れ気味に千冬さんが言いましたとさ。
すぐに全員動いて終わったのは言うまでもない。
で俺だが

「シャルル、問題はないか？」

「うん、みなさんが優しいから大丈夫」

・・・貴公子だなく。
そんな事思っているとアクシデントが。

「あのゝ届かないんだけど」

「「あ」」

前に乗った人がISをしゃがませないで解除したらしい。専用機と違って立ったままになるからな。
ここは・・・

「なあシャルル。持ち上げてやるから乗ってしゃがませてくれよ」

「ああうん、いいよって!?!」

いや驚かなくてもいいだろ。ただ持ち上げて肩に乗せただけなんだから。
まあ行き成りだったけど。

「は、早くおろして！」

「いやここで降ろしてどうなるんだよ？」

「け、けど！」

「まさか・・・俺が嫌いなのか？」

「き、嫌いじゃないけど・・・／／／」

そう言う間にも空いている左手を使って割と簡単に上り

「じゃあ頼むぞ」

「・・・うん／／／」

シャルルを乗せて降りる。

この間に「やっぱり涼介くん×デュアノくんかな？」なんて声が多数聞こえたが・・・俺は気にしない。

さてと後はシャルルが上手くやるだろうから・・・

「銀髪少女改めホーデヴィツヒさんか」

やってるはずの場所に行くと

「・・・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・」」

・・・・・・・・うわゝ空気が重い。

「えっと今誰までやった？」

「ええと、私」

「次の人、やり方分かる？」

「うん、たぶん大丈夫」

「分からなかったら言えばすぐ来るから」

「え、あ、うん。ありがとう」

とりあえずそう言ってホーデヴィツヒさんの所へ向かう。

「……ホーデヴィツヒさん？ちゃんと言われたことしないと織斑先生に怒られるぞ？」

「……………」

「いやまあ折角の青春ずっと黙ってる訳にもいかないだろう？」

「……………」

「ほらゝ笑顔、笑顔」

「うるさい。黙ってろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・ここで少しいじわるする俺は悪くないと思う。

「あ、織斑先生」

「なに！？教官だ！？」

すぐに体勢を整え敬礼するあたり軍人だなくって思ったり。
けど

「いない！？貴様！」

「行き成りビンタされて頭にシャーペン刺された仕返しさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・突っ込み役がないのは辛いな。

「・・・・・・・・貴様がいたせいで教官の経歴に傷がついた」

「・・・・・・・・大会か？」

「そうだ」

第二回 I S 世界大会『モンド・グロッソ』の決勝戦。

第一回で優勝をした千冬さんは最有力候補だった。

しかしある事件のせいで棄権することになる。

それが

「誘拐されたことが悪いってのか？」

俺と一夏が誘拐された。それを助ける為千冬さんは決勝に間に合わなかった。

「・・・いや、お前らは悪くないのかもしれない」

「は？」

「わざわざ死んでるかもしれない家族を助けに行った教官がおかしいのかもな」

「な！？テメエ！言うに事欠いてそれか！？」

俺の悪口はいい。何を言われようと許す。いや笑ってられる。けど千冬さんと一夏の悪口を言ったやつは・・・

「ぶっ飛ばしてやる！」

「フン、出来るものならやってみろ」

そして俺は拳を握りしめ・・・何もしなかった。

「どうした？怖気づいたか？」

「・・・お前、勘違いしてるんだ」

「何を言って・・・？」

「お前は強すぎる千冬さんを見たんだろ？それを目指してしまったんだ。だから今の千冬さんが許せない」

「・・・・・・・・・・」

「今の優しくて、こんなところに居る千冬さんを目標にできない・・・」

「私は教官を目標にして――」

「そう、お前は教官だった・・・強く、冷たい千冬さんを必死に真似しようとしている」

「教官はいつだって強い。強すぎるくらいに」

「そうだ。だがお前が考える強さとは違う。だから理解できない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前が学園で千冬さんの強さを理解できることを祈っている」

「・・・下らん。聞くだけ無駄だったようだ」

そのままスタスタと歩いて去っていく。

「ハハ、俺が説教だなんていい身分だな」

さっきの自分を思い出すと笑ってしまう。
自分は千冬さんに教えて貰って分かったくせに。

「千冬さんの強さは力だけじゃないってことに」

アイツは俺のように都合よく分かる事が出来るはずがない。
なら

「俺が教えてやるしかないか」

自分で気づく事を祈るがな。
なんか転入生はみんな俺にとって厄介な奴ばかりだな。
まさかシャルルもか？

「涼介くん！ちょっと手伝って！」

「分かった。今いく！」

そこで俺は思考を中断する。

まあ人生は色々あるもんだ。
とにかく俺は出来ることをやっていこう。
そう思うのであった。

第十六話「二人の転人生」（後書き）

あとがきコーナー

作「前書きは・・・気にしない方向で」

涼「頭が・・・主にシャーペンで」

作「・・・うん痛そう」

作「天照大神さん、龍賀さん、感想ありがとうございました！」

涼「で少しお知らせ？」

作「うん。

実は私、受験生でしてそろそろヤバいんですよ。それでおそらく更新が週一より少なくなってしまう・・・」

涼「更新はするので見捨てないで頂けるとうれしいです」

作「では！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356t/>

I S 〈インフィニット・ストラトス〉～五つのコアを持つ男～

2011年8月16日00時55分発行